

宮崎市文化財調査報告書 第143集

しま の うち はぎ さき い せき  
島之内萩崎遺跡（第2・3・5地点）

国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金対象事業発掘調査報告書



2024

宮崎市教育委員会

宮崎市文化財調査報告書 第143集

しま の うち はぎ ざき い せき  
島之内萩崎遺跡（第2・3・5地点）

国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金対象事業発掘調査報告書



2024

宮崎市教育委員会



頁	行	誤	正
8	19	( 1 )	(1)
8	20	( 2 )	(2)
9	—	第11図 第2地点出土 遺物実測図 (S=1/3)	第11図 第2地点出土 遺物実測図 (S=1/3・1/2) ※掲載番号10が1/2
24	—	石器 (143~147)	石器 (143~147)・古銭 (121~122)
45	—	第42図 掘立柱建物16実測図 (S=1/80) ・出土遺物実測図 (S=1/3)	第42図 掘立柱建物16実測図 (S=1/80) ・出土遺物実測図 (S=2/3)
50	—	第53図 土坑5実測図 (S=1/40) ・出土遺物実測図 (S=1/3)	第53図 土坑5実測図 (S=1/40) ・出土遺物実測図 (S=1/3)
53	—	第57図 第5地点柱穴出土 遺物実測図 (S=2/3・1/3)	第57図 第5地点柱穴出土 遺物実測図 (S=2/3・1/3・1/2)
54	—	第58図 第5地点出土遺物実測図②	第58図 第5地点柱穴出土遺物実測図②
67	17	中期後半 (河野3期:前掲)	中期後半古相 (河野3期:前掲)

## 序 文

本書は平成27年度から令和元年度にかけて実施された、民間開発に伴う発掘調査報告書です。

宮崎市内には約850箇所の遺跡が所在しており、旧石器時代から近世にかけての豊かな歴史的遺産が残されています。また、こうした歴史的遺産を後世に伝えるため、本市では開発事業に伴う発掘調査・保存活動に取り組んでいるところです。

今回の発掘調査では、弥生時代から近世にかけての遺構や遺物が多数発見されました。特に、弥生時代の環濠とみられる大溝の発見は、本市における弥生文化の波及を考えるうえで重要な成果となりました。本書の成果が広く市民のみなさまに活用されると幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力頂いた皆様に感謝申し上げますと共に、今後とも本市の文化財保護行政にご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和6年3月

宮崎市教育委員会

教育長 西田 幸一郎

# 例 言

1. 本書は平成27年度、29年度、30年度～令和元年度に実施した、民間開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、宮崎市教育委員会文化財課が民間事業者から依頼を受け実施した。
3. 発掘調査に伴う文化財保護法の手続きは以下の通りである。

## (第2地点)

確認調査完了報告	平成27年11月24日	宮教文第599号5
工事届(同法第93条第1項)	平成27年12月24日	宮教文第810号1(進達)
〃	平成28年1月8日	宮教文第810号3(伝達)
着手報告(同法第99条第1項)	平成28年2月25日	宮教文第868号2
完了報告	平成28年3月11日	宮教文第868号4
発見通知(同法第100条第1項)	平成28年3月11日	宮教文第1025号
保管証	平成28年3月18日	宮教文第1025号1

## (第3地点)

試掘調査完了報告	平成27年11月24日付	宮教文第631号4
工事届(同法第93条第1項)	平成28年5月17日付	宮教文第218号1(進達)
〃	平成28年6月2日付	宮教文第218号3(伝達)
着手報告(同法第99条第1項)	平成29年5月16日付	宮教文第180号
完了報告	平成29年6月2日付	宮教文第180号2
発見通知(同法第100条第1項)	平成29年6月2日付	宮教文第180号1
保管証	平成29年6月7日付	宮教文第180号4

## (第5地点)

確認調査完了報告	平成29年7月13日	宮教文第238号3
工事届(同法第93条第1項)	平成31年1月28日付	宮教文第842号1(進達)
〃	平成31年2月12日付	宮教文第842号3(伝達)
着手報告(同法第99条第1項)	平成31年4月1日付	宮教文第944号2
完了報告	令和元年6月12日付	宮教文第12号4
発見通知(同法第100条第1項)	令和元年6月10日付	宮教文第12号3
保管証	令和元年6月14日付	宮教文第12号5

4. 現地における発掘調査、室整理作業は以下の期間実施した。

## (第2地点)

発掘調査：平成28年2月18日～平成28年3月18日  
整理作業：平成28年度

## (第3地点)

発掘調査：平成29年5月8日～平成29年5月31日  
整理作業：平成30年度～令和元年度

## (第5地点)

発掘調査：平成31年3月12日～令和元年6月5日  
整理作業：令和元年度～令和4年度

## 5. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会 文化財課

(平成27年度：第2地点発掘調査)

調査総括	課長	日高 貞幸
	課長補佐	小窪 裕俊
	埋蔵文化財係長	井田 篤
調整事務	主査	鳥枝 誠
庶務担当	主任主事	谷口 広清
調査担当	主査	稲岡 洋道
	嘱託員	川野 誠也

(平成29年度：第3地点発掘調査)

調査総括	課長	羽木本光男
課長補佐		小窪 裕俊
	副主任兼埋蔵文化財係長	井田 篤
調整事務	主査	金丸 武司
庶務担当	主事	村尾 芽以
調査担当	主査	秋成 雅博
	嘱託員	白上いづみ

(令和元年度：第5地点発掘調査・第3・5地点整理作業)

調査総括	課長	富永 英典
	課長補佐	川崎 章弘
	主幹兼埋蔵文化財係長	井田 篤
調整事務	主査	稲岡 洋道
庶務担当	主事	杉尾 悠
調査担当	主任技師	河野 裕次
	会計年度任用職員	古田矩美子
		佛山 友香
整理担当	主査	秋成 雅博
	主任技師	河野 裕次
	会計年度任用職員	小野 貞子
		船石 涼代
		沼口 常子

(平成28年度：第2地点整理作業)

調査総括	課長	日高 貞幸
	課長補佐	小窪 裕俊
	埋蔵文化財係長	井田 篤
調整事務	主査	金丸 武司
庶務担当	主事	武富 知子
整理担当	主査	稲岡 洋道
	嘱託員	小牟田智子

(平成30年度：第5地点発掘調査・第3地点整理作業)

調査総括	課長	富永 英典
課長補佐		甲斐 史哲
	主幹兼埋蔵文化財係長	井田 篤
調整事務	主査	金丸 武司
庶務担当	主事	杉尾 悠
調査担当	主査	竹中 克繁
	嘱託員	古田矩美子
整理担当	主査	秋成 雅博
	嘱託員	沼口 常子

(令和2年度：第5地点整理作業)

調査総括	課長	白坂 敦
	課長補佐	川崎 章弘
	主幹兼埋蔵文化財係長	井田 篤
調整事務	主査	秋成 雅博
庶務担当	主事	高田 真帆
整理担当	主任技師	河野 裕次
	会計年度任用職員	徳丸 理奈

(令和3年度：第5地点整理作業)

調査総括	課長	白坂 敦
	課長補佐	久保 陽子
	埋蔵文化財調査係長	秋成 雅博
調整事務	主査	石村 友規
庶務担当	主事	高田 真帆
整理担当	主任技師	河野 裕次
	会計年度任用職員	徳丸 理奈
		小野 貞子

(令和4年度：第5地点整理作業)

調査総括	課長	白坂 敦
	課長補佐	井田 篤
	埋蔵文化財調査係長	秋成 雅博
調整事務	主査	石村 友規
庶務担当	会計年度任用職員	宜野座さち
整理担当	主査	河野 裕次
	会計年度任用職員	徳丸 理奈
		菊地ひろみ

(令和5年度：第2・3・5地点報告書編集作業)

調査総括	課長	町田 英則
	課長補佐	井田 篤
	主幹兼埋蔵文化財調査係長	秋成 雅博
調整事務	主査	西嶋 剛広
庶務担当	会計年度任用職員	野津原広枝

整理担当	主幹兼文化財整備活用係長	稲岡 洋道
	主幹兼埋蔵文化財調査係長	秋成 雅博
	主査	河野 裕次
	会計年度任用職員	徳丸 理奈

- 現地における測量はトータルステーション（遺構くん cubic）を用いて行ない、個別の遺構実測図は1/20・1/10で作成した。また、個別遺構の写真撮影については6×7判モノクロ・リバーサルフィルムと35mmモノクロ・リバーサルフィルムを併用した。
- 現地における実測は稲岡、秋成、河野、川野、白上、古田が行なった。
- 第5地点における空中写真撮影は（有）スカイサーベイ九州に委託した。
- 本書に掲載した遺物の実測及びトレースは調査員、会計年度任用員、整理作業員が分担し、一部を（有）ジバンクサーベイに委託して行なった。
- 本書における遺構略号は以下の通りである。  
SA：竪穴建物 SB：掘立柱建物 SC：土坑 SE：溝状遺構 SH：柱穴
- 本書に掲載した遺物実測図の縮尺は、土器・須恵器 1/3、剥片石器 2/3、礫石器 1/2、鉄器 1/2であり、その他のものについては図中に示している。
- 本書に掲載した遺物実測図の表現については、以下の通りである。  
強い稜線：実線 弱い稜線：破線 被熱の範囲：網掛け 磨面の範囲：矢印  
調整の表現：以下の通り



- 本書における土色の表記は『新版 標準土色帖』に依拠した。
- 本書で示す方位は全て真北を示す。
- 発掘調査により出土した遺物、及び調査における図面、写真、記録等は宮崎市教育委員会が保管している。
- 本書の編集は稲岡、秋成、河野が担当した。



## 本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
第1節	地理的環境	1
第2節	遺跡の名称の変更について	4
第Ⅱ章	第2地点の調査成果	5
第1節	調査に至る経緯	5
第2節	調査成果	6
第Ⅲ章	第3地点の調査成果	14
第1節	調査に至る経緯	14
第2節	弥生時代から古代の調査成果	14
第3節	近世の調査成果	20
第4節	その他	23
第Ⅳ章	第5地点の調査成果	35
第1節	調査に至る経緯	35
第2節	弥生時代の調査成果	35
第3節	中世から近世の調査成果	43
第4節	小結	55
第Ⅴ章	まとめ	67
第1節	島之内萩崎遺跡の弥生時代の 調査成果	67
第2節	島之内萩崎遺跡の近世の 調査成果	68

## 挿図目次

第1図	島之内萩崎遺跡周辺遺跡分布図	2
第2図	調査地点周辺地形図	3
第3図	島之内萩崎遺跡調査地点箇所図	4
第4図	島之内萩崎遺跡第2地点 第3地点周辺地形図	5
第5図	島之内萩崎遺跡第2地点遺構配置図	6
第6図	2号溝状遺構実測図	7
第7図	2号溝状遺構土層断面図	7
第8図	2号溝状遺構出土遺物実測図	7
第9図	1号溝状遺構実測図	8
第10図	1号溝状遺構土層断面図	8
第11図	第2地点出土遺物実測図①	9
第12図	第2地点出土遺物実測図②	10

第13図	島之内萩崎遺跡第3地点 遺構配置図	15
第14図	土坑5実測図・出土遺物実測図	16
第15図	土坑5出土遺物実測図	17
第16図	土坑8実測図・出土遺物実測図	17
第17図	土坑10実測図・出土遺物実測図	18
第18図	土坑11実測図・出土遺物実測図	18
第19図	土坑16実測図・出土遺物実測図	18
第20図	土坑9・14実測図	18
第21図	溝状遺構4土層断面図 ・出土遺物実測図①	19
第22図	溝状遺構4出土遺物実測図②	20
第23図	溝状遺構12下層出土遺物実測図	20
第24図	第3地点溝状遺構配置図 ・土層断面図	21
第25図	溝状遺構2出土遺物実測図	22
第26図	溝状遺構7出土遺物実測図	22
第27図	南側遺物包含層出土遺物実測図	23
第28図	SK3出土遺物実測図①	24
第29図	SK3出土遺物実測図②	25
第30図	第3地点試掘調査・採集遺物 実測図	25
第31図	第3地点採集遺物実測図	26
第32図	島之内萩崎遺跡第5地点 遺構配置図	36
第33図	第5地点弥生時代 主要遺構配置図	37
第34図	掘立柱建物14実測図 ・出土遺物実測図	38
第35図	掘立柱建物15実測図 ・出土遺物実測図	38
第36図	溝状遺構6実測図 ・出土遺物実測図①	39
第37図	溝状遺構6出土遺物実測図②	40
第38図	溝状遺構6出土遺物実測図③	41
第39図	溝状遺構6上層出土遺物実測図	42
第40図	第5地点包含層出土遺物実測図	43
第41図	第5地点中世・近世 主要遺構配置図	44

## 表目次

第42図	掘立柱建物16実測図	・出土遺物実測図……………45
第43図	掘立柱建物17実測図	・出土遺物実測図……………45
第44図	掘立柱建物18実測図	・出土遺物実測図……………45
第45図	掘立柱建物19実測図	・出土遺物実測図……………46
第46図	掘立柱建物20実測図	・出土遺物実測図……………46
第47図	掘立柱建物21実測図	・出土遺物実測図……………47
第48図	掘立柱建物22実測図	・出土遺物実測図……………47
第49図	掘立柱建物23実測図	・出土遺物実測図……………48
第50図	掘立柱建物24実測図	・出土遺物実測図……………49
第51図	掘立柱建物25実測図	・出土遺物実測図……………49
第52図	掘立柱建物26実測図	・出土遺物実測図……………50
第53図	土坑5実測図・出土遺物実測図……………50	
第54図	土坑8実測図・出土遺物実測図……………51	
第55図	土坑13実測図……………51	
第56図	溝状遺構9・11・12実測図	・断面図……………52
第57図	第5地点柱穴出土遺物実測図①……………53	
第58図	第5地点柱穴出土遺物実測図②……………54	
第59図	第5地点その他の遺物実測図……………55	
第60図	第1地点・第5地点溝状遺構	位置図……………67

第1表	島之内萩崎遺跡調査地点	新旧対照表……………4
第2表	第2地点出土土器観察表……………11	
第3表	第2地点出土陶磁器観察表……………11	
第4表	第2地点出土土製品観察表……………11	
第5表	第2地点出土石器観察表……………11	
第6表	第3地点出土土器観察表①……………26	
第7表	第3地点出土土器観察表②……………27	
第8表	第3地点出土土器観察表③……………28	
第9表	第3地点出土陶磁器観察表……………29	
第10表	第3地点出土石器観察表……………29	
第11表	第3地点出土金属製品観察表……………29	
第12表	第5地点出土土器観察表①……………56	
第13表	第5地点出土土器観察表②……………57	
第14表	第5地点出土土器観察表③……………58	
第15表	第5地点出土陶磁器観察表……………59	
第16表	第5地点出土石器観察表……………59	
第17表	第5地点出土金属製品観察表……………59	
第18表	佐土原藩領域における 出土陶磁器一覧表……………68	

## 図版目次

図版1	第2地点遺構写真……………12
図版2	第2地点出土遺物写真……………13
図版3	第3地点遺構写真①……………30
図版4	第3地点遺構写真②……………31
図版5	第3地点出土遺物①……………32
図版6	第3地点出土遺物②……………33
図版7	第3地点出土遺物③……………34
図版8	第5地点空中写真・遺構写真①……………60
図版9	第5地点遺構写真②……………61
図版10	第5地点溝状遺構6出土遺物……………62
図版11	第5地点遺構写真③……………63
図版12	第5地点掘立柱建物出土遺物①……………64
図版13	第5地点掘立柱建物出土遺物②……………65
図版14	第5地点柱穴出土遺物……………66

## 第1章 はじめに

### 第1節 地理的環境

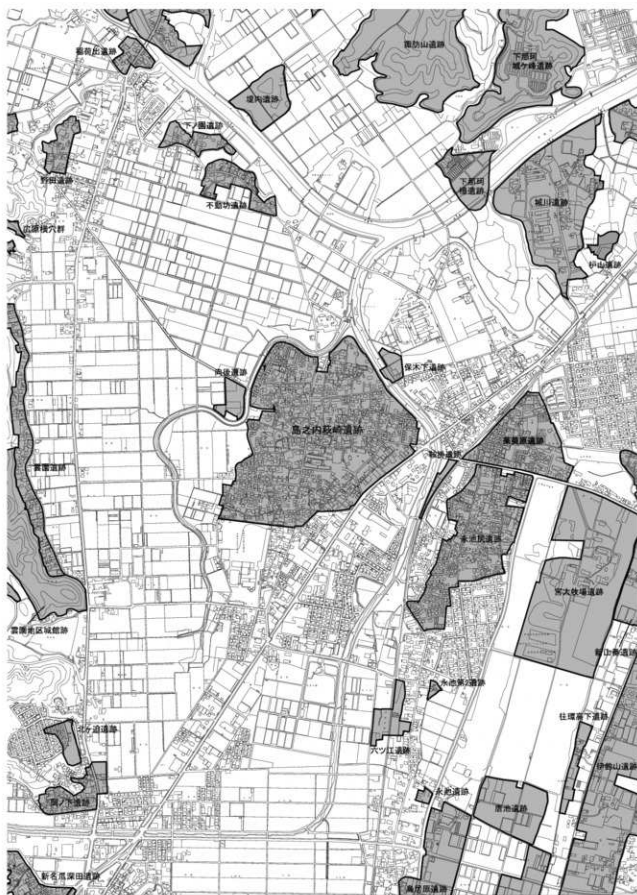
島之内萩崎遺跡が所在する宮崎県宮崎市は九州島の東南部、日向灘に面した宮崎平野の南半に位置する。宮崎平野は北西側を九州山地、南西側を南那珂山地に遮られた南北約60kmの範囲に広がる平野であり、宮崎市域では標高20～80mの丘陵部と、標高10m以下の沖積平野からなる。沖積平野部は砂丘や自然堤防などの微高地や、旧河道などの低湿地が入り組んだ起伏に富んだ地形を呈する。また、市域の東側は日向灘に面しており、青島以北は約30kmの海岸線が広がっている。平野の隆起と海退による陸地化により、この海岸線に沿って4本の砂丘列が形成されている。さらに、宮崎平野の南部は入戸火砕流堆積物（シラス）の北限となっており、特に清武川流域以南では典型的なシラス台地が分布する。

本遺跡は宮崎市北部の大字島之内字萩崎に所在する、石崎川支流の新名爪川と住之江川に挟まれた微高地上に立地している。この微高地は、鬼界アカホヤ火山灰降灰（約7300前）以後に離水して形成された、下田島I面の砂丘（第1砂丘）及び河成段丘上にあたる。この砂丘は第1砂丘と呼ばれる砂丘列のうち、最も内陸にあたる南北に長い砂丘である。砂丘周辺は、後背湿地が河川的作用で氾濫平野化または低位段丘化した低地が広がり、地名が表すとおり「島」状の微高地を形成している。

砂丘の東西を北流する新名爪川と住之江川、また両者が合流する石崎川の下流域には、弥生時代以降の遺跡が多数確認されている。新名爪川の河川改修に伴って発掘調査された保木下遺跡では、中世後半期と推定される水田が確認された他、弥生時代の遺物が河川堆積層から多数出土している。また、石崎川沿いの独立小丘陵裾部に所在する堤下遺跡では、弥生時代から奈良・平安時代の遺物が出土している。さらに、本遺跡の範囲内とその周辺に前方後円墳や横穴を含む県指定史跡「住吉村古墳」が所在する。墳丘が現存するのは墳長約70mの前方後円墳である住吉1号墳のみであり、採集された円筒埴輪片から古墳時代中期中葉に位置付けられている。1号墳に隣接する第4地点の発掘調査では、古墳に伴う遺構は確認されなかったものの、埴輪片が出土している。また、本遺跡西側の丘陵には7世紀中葉頃に造営された広原横穴群が所在する。その内の1号横穴（市指定史跡）、3号横穴には、人物像を中心とした線刻壁画が描かれている。近世になると、島之内地区は佐土原藩島津氏の領地となる。しかし、5代藩主久寿が6代惟久に家督を譲る際、3000石を島之内に分与されて旗本寄合となり、以後は佐土原藩から独立した歴史を歩んでいく。

#### 【引用文献】

- 佐土原町教育委員会 1999『堤下遺跡』佐土原町文化財調査報告書第17集  
 宮崎県教育委員会 1986『保木下遺跡』  
 宮崎市教育委員会 1979『広原横穴群』宮崎市文化財調査報告書第5集  
 宮崎市教育委員会 2019『中小路遺跡』宮崎市文化財調査報告書第127集



第1図 島之内萩崎遺跡周辺遺跡分布図(S-1/15000)



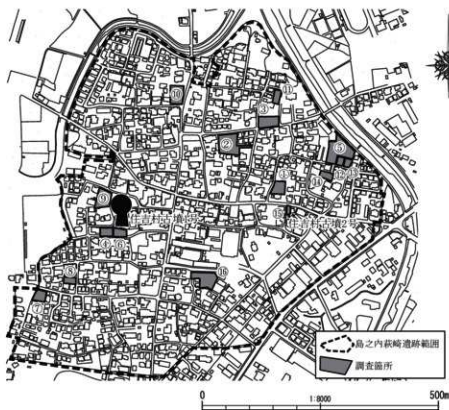
第2図 調査地点周辺地形図(S=1/3000)

## 第2節 遺跡の名称変更について

宮崎市では平成18年の佐土原町、高岡町、田野町、22年の清武町との合併後、平成23年度から令和3年度の期間に遺跡詳細分布地図の改訂作業をおこない、令和4年12月に改訂が終了した。この作業では包蔵地のライン範囲とともに、遺跡名称の改訂も行われた。今回報告する島之内萩崎遺跡は従来の遺跡地図では包蔵地外のエリアが大半であったが、一帯での試掘調査事例の増加とともに、弥生から近世の埋蔵文化財が面的に分布することが明らかになってきた。そのため、一帯を「島之内萩崎遺跡」に改訂し、従来本調査の度に付されていた遺跡名称を「第〇地点」に改めることとし、試掘確認調査を実施した箇所も地点番号を付した。

第1表 島之内萩崎遺跡調査地点新旧対照表

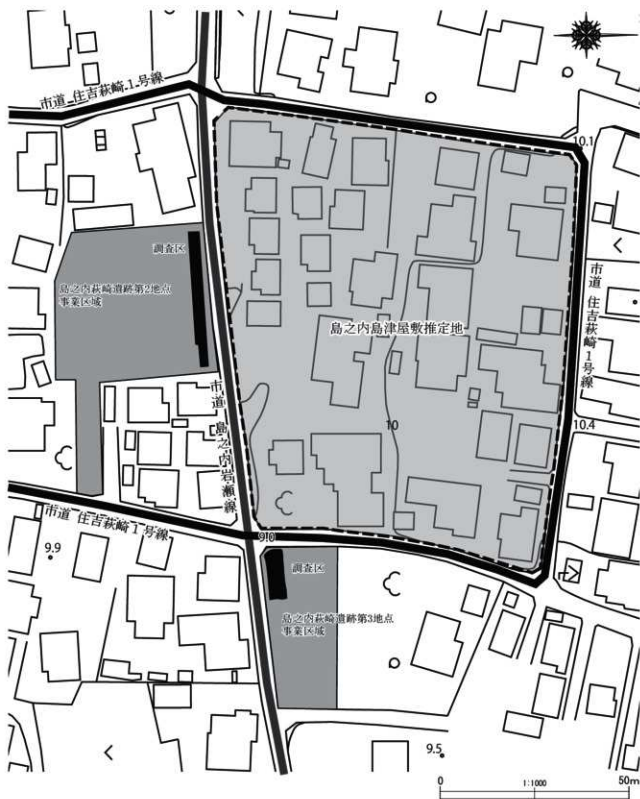
①	第1地点	調査内容 (調査年度)		旧名称	⑨	第9地点	調査内容 (調査年度)		旧名称
		試掘調査 (平成15年度)	本調査 (平成15年度)				試掘調査 (平成18年度)	—	
②	第2地点	試掘調査 (平成27年度)	本調査 (平成27年度)	島之内萩崎第2遺跡	⑩	第10地点	試掘調査 (平成28年度)	—	—
③	第3地点	試掘調査 (平成27年度)	本調査 (平成29年度)	島之内萩崎第3遺跡	⑪	第11地点	試掘調査 (令和元年度)	—	—
④	第4地点	試掘調査 (平成28年度)	本調査 (平成28年度)	中小路遺跡	⑫	第12地点	試掘調査 (平成28年度)	—	—
⑤	第5地点	試掘調査 (平成29年度)	本調査 (平成30年度)	島之内萩崎第4遺跡	⑬	第13地点	試掘調査 (平成29年度)	—	—
⑥	第6地点	確認調査 (令和4年度)	本調査 (令和4年度)	島之内萩崎遺跡	⑭	第14地点	試掘調査 (平成28年度)	—	—
⑦	第7地点	試掘調査 (令和4年度)	—	—	⑮	第15地点	試掘調査 (H30年度)	—	—
⑧	第8地点	試掘調査 (令和4年度)	—	—	⑯	第16地点	試掘調査 (平成28年度)	—	—



第3図 島之内萩崎遺跡調査地点箇所図 (S=1/8000)

## 第Ⅱ章 第2地点の調査成果

### 第1節 調査に至る経緯



第4図 島之内荻崎遺跡第2地点、第3地点周辺図 (S=1/1000)

今回の島之内萩崎遺跡第2地点の発掘調査原因は個人事業者による共同住宅建設に伴うL型擁壁の整備である。平成27年6月に共同住宅建設計画のある個人事業者より、当該地における文化財の有無照会があり、平成15年度に本調査を実施した島之内萩崎遺跡(現、第1地点)に近接していることから、宮崎市教育委員会が平成27年10月に、遺跡の有無を確認するための試掘調査を実施。調査の結果、事業予定地から弥生時代、近世期の遺物が確認され、宮崎県教育委員会により平成27年12月3日付で周知の埋蔵文化財包蔵地「島之内萩崎第2遺跡」に決定した。

その後、事業者側が当該地における建築設計を行う過程で、事業地北側の東西方向に走る市道島之内岩瀬線沿いにL型擁壁の整備が必要となり、平成27年12月に事業者より、埋蔵文化財発掘の届出が提出。L型擁壁の整備箇所を対象に、本発掘調査が必要となった。

平成28年1月19日付で発掘調査の実施依頼があり、本発掘調査を平成28年2月18日から3月8日の期間実施した。

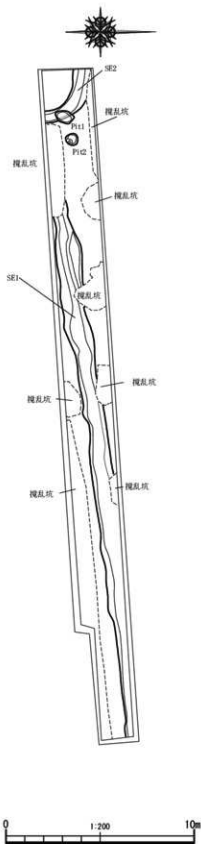
## 第2節 調査成果

### 第1項 調査地の周辺地形(第4図)

今回、共同住宅建設の調査対象地となった区画は、住宅地の中にあり、事業計画が上がる以前は個人の居宅の敷地であった。敷地はいわゆる旗竿地の形状で、敷地東側で市道住吉萩崎1号線に狭い間口が接しており、奥となる西側が袋地となり、家屋が建っていた。

調査地の標高は約10.0mで敷地北側を東西方向に走る市道島之内岩瀬線より約1.9mより高いが、その市道を挟んだ向かい側(北側)の土地と調査地はほぼ同標高であり、つまりは市道が堀底を路面として整備された特異な形状となっている。

島之内萩崎遺跡を含む地域一帯は、江戸期



第5図 島之内萩崎遺跡第2地点遺構配置図  
(S=1/200)

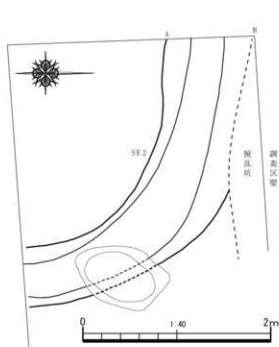


は佐土藩の領域であった。佐土原藩には島津以久が慶長八年(1603)に初代藩主として入城した。六代藩主惟久の元禄(1690)のころ、五代藩主として番代を務めた島津久寿に、藩内の広原村の島之内三千石を分知したと「日向国佐土原領郷村寄目録」に記載されている。島之内地区には現在も島津姓の民家、法人が数軒ある。

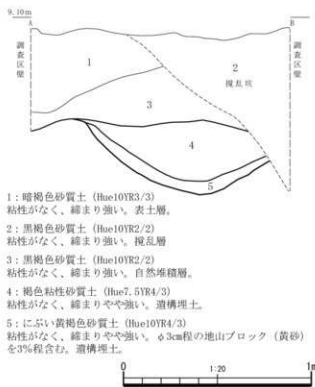
調査地北側を走る市道島之内岩瀬線の現在は住宅地となっている区画が、地域の言い伝えでは、島之内島津家の屋敷があった箇所として伝えられている。この区画は一边が市道島之内岩瀬線に面しているものの、他3辺は市道住吉萩崎線に接しており、つまりは島之内島津家推定地を市道住吉萩崎線がコの字に取り囲むように巡っており(第4図)、市道の法線も当時の境界を示している可能性がある。

## 第2項 調査対象地の土層堆積

第2地点の全体的な土層堆積は粘性のない砂質土であり、第3地点、第4地点同様、日向灘に平行して形成された4列の砂丘のうち、最も古く、内陸側に形成された第1砂丘上に立地する。基本土層の堆積は、上部よりI層 暗褐色砂質土(造成土 厚さ20~50cm)が、II層 黒褐色砂質土(自然堆積土 厚さ0~40cm)、III層 黄褐色砂質土(自然堆積土 厚さ40cm以上)である。遺構検出面はIII層上面で、II層は本来的には調査区全体に堆積していたものと思われるが、調査



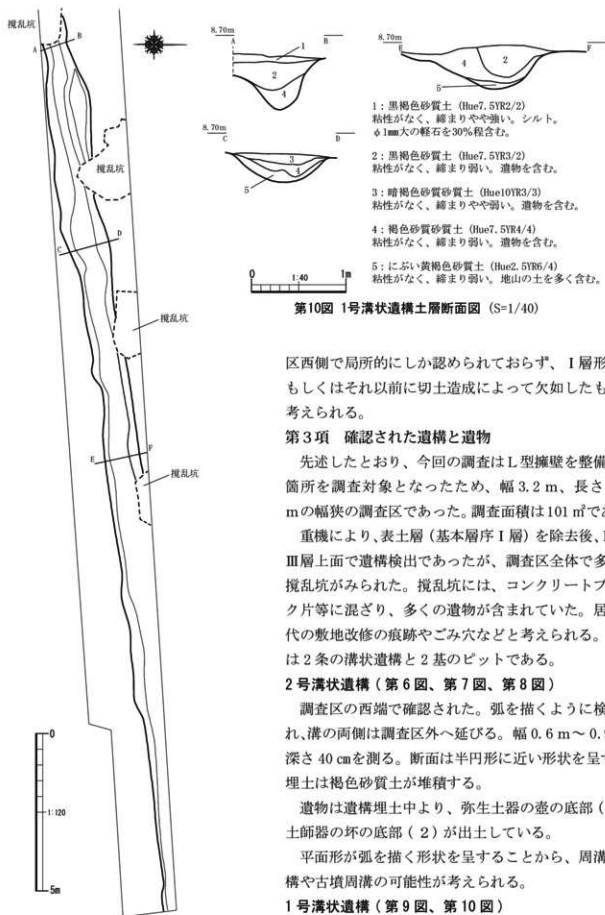
第6図 2号溝状遺構実測図(S=1/40)



第7図 2号溝状遺構土層断面図(S=1/20)



第8図 2号溝状遺構出土物実測図(S=1/3)



第10図 1号溝状遺構土層断面図 (S=1/40)

区西側で局所的にしか認められておらず、I層形成時もしくはそれ以前に切土造成によって欠如したものと考えられる。

### 第3項 確認された遺構と遺物

先述したとおり、今回の調査はL型擁壁を整備する箇所を調査対象となったため、幅3.2m、長さ35.6mの幅狭の調査区であった。調査面積は101㎡である。

重機により、表土層（基本層序I層）を除去後、II層、III層上面で遺構検出であったが、調査区全体で多くの攪乱坑がみられた。攪乱坑には、コンクリートブロック片等に混ざり、多くの遺物が含まれていた。居宅時代の敷地改修の痕跡やごみ穴などと考えられる。遺構は2条の溝状遺構と2基のピットである。

#### 2号溝状遺構（第6図、第7図、第8図）

調査区の西端で確認された。弧を描くように検出され、溝の両側は調査区外へ延びる。幅0.6m～0.9m、深さ40cmを測る。断面は半円形に近い形状を呈する。埋土は褐色砂質土が堆積する。

遺物は遺構埋土中より、弥生土器の壺の底部（1）、土師器の坏の底部（2）が出土している。

平面形が弧を描く形状を呈することから、周溝状遺構や古墳周溝の可能性が考えられる。

#### 1号溝状遺構（第9図、第10図）

ほぼ直線的に設けられた溝状遺構で、幅狭の調査区

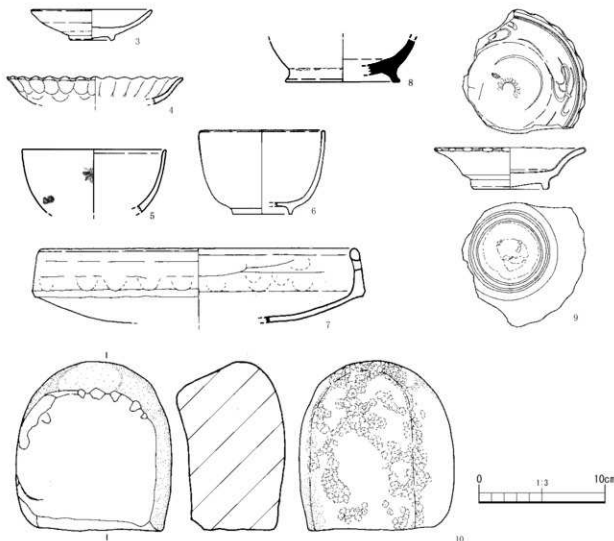
第9図 1号溝状遺構実測図 (S=1/120)

を斜めに横切るように検出された。幅0.9～1.6m、検出された延長は28.4mを測り、東側は調査区東側調査区外へ延び、西側は攪乱坑により不明となっている。溝の底面は東側から西側に向かい下り勾配となっており、断面形は基本的に半円形を呈するが、底面が深くなる西側に向かっていくに従い、U字形に近い形状を呈する。埋土は2号溝状遺構とは異なり、シルト質が強い。A-B断面付近では埋土の最上部で30%の割合で直径1mm程の軽石を含んでいるが、流れ込みによる局所的な堆積と考えられる。

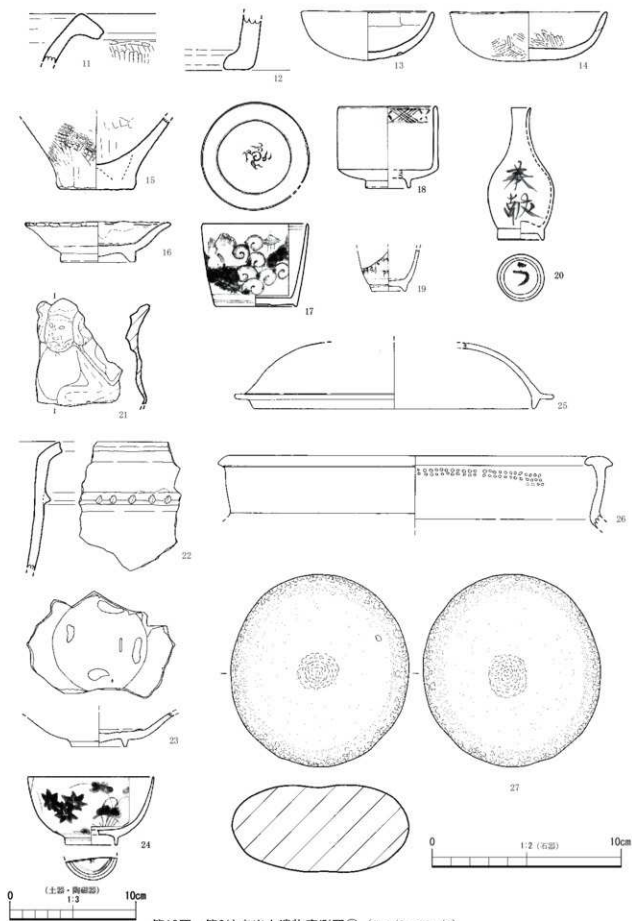
遺物は遺構の埋土中から、17世紀後半～19世紀前半にかけての肥前系の皿(4)、染付碗(5)や焙烙(7)を中心に、8世紀後半頃の須恵器の坏(8)や15～16世紀の白磁皿(1)、青磁皿(9)が出土している。4、5、6が構築時期を反映しているものと考えられ、地山の性質から排水施設とは考えにくく、東西方向にのびる北側の市道に沿うように設けられていることから、道路状遺構や居宅の区画のための溝の性格が考えられる。

### ピット1、ピット2(第5図)

調査区の西側で並ぶように検出された。ピット1は2号溝状遺構を切って検出された。ピット1は楕円形プランで長軸0.8m短軸0.6m、ピット2は円形プランで直径0.6mを測り、それぞれの深さが0.3mである。性格は不明であるが、埋土は基本層序II層に近い黒褐色砂質土で、埋土



第11図 第2地点出土遺物実測図① (S=1/3)



第12図 第2地点出土遺物実測図② (S=1/3・S=1/2)

中からは土師器片が出土している。時期は不明であるが、埋土の状況から2号溝状遺構から1号溝状遺構が構築されるまでの期間の中で設けられたものと考えられる。

### 基本層序1層・攪乱坑出土遺物(第12図)

基本層序1層、攪乱坑からはブロックの破片等とともに、多様な時期の遺物が出土している。古相のものは、11の壺の口縁部が弥生中期後葉、22の貼り付け突帯を施す甕の口縁部が弥生後期前半頃で、終末頃の外面にタタキを施す甕の底部(15)もある。13、14は土師器の椀でTK47～MT15並行段階のものと考えられる。この他、16は青磁の輪花皿で1号溝状遺構からも同形状のもの(9)が出土しており、14世紀後半から16世紀頃と考えられる。その他の多くは17～19世紀の1号溝状遺構の磁器に近いものが多いが、これらに混ざりガラス瓶が多く出土している。高さ10cmに満たないものが多く、薬瓶が主体で中には「中島医院」の名称が見られるものもある。ガラス瓶については図版2に写真のみ掲載している。

第2表 第2地点出土土器観察表

高取目 図版番号	遺構等	種別	器種	法量 cm ( ) 程度			色		構成	調査		新土(上:mm F:数)					備考	実測 番号
				口径	高さ	器高	外面	内面		外面	内面	A	B	C	D	E		
p.7 第10図	1	SE2	土師器 壺	—	(14.8)	—	—	—	良好	斜・縦方向のナ ギによるナギ	指押さへ、ナ デ	微 少					底面 ナデ	8
	2	SE2	土師器 壺	—	(7.6)	—	—	—	良好	回転ナデ	ナデ? 磨耗し く不明						底面 ナデ	9
p.9 第11図	7	SE1 SE2-4	SE1 SE2-4	磁器 磁器	(24.6)	—	—	—	良好	指押さへと縦横 方向のナデ、ナ ギ	指押さへと縦横 方向のナデ、ナ ギ	微 少	4.5	1	1	1	外面 スチガ	1
	8	SE1	磁器器 瓶	—	(9.0)	—	—	—	良好	回転ナデ	回転ナデ							5
p.10 第12図	11	攪乱坑①	土師器 壺	—	—	—	—	—	良好	ヨコナデ、工具 による削いナ デ、縦方向のナ ギ、斜・縦・横 方向のミガキ	縦方向のナデ	1					内面 一面朱塗り?	15
	12	攪乱坑④	土師器 壺	—	—	—	—	—	良好	磨耗著しく不明 瞭	工具によるナ デ、ナデ			1	1	1	底面 磨耗著しく不明 瞭	16
p.10 第12図	13	攪乱坑⑤	土師器 椀	10.35	—	3.9	—	—	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	3	0.5				外面 黒磁 植物画瓦反	18
	14	攪乱坑⑥	土師器 椀	12.3	約6.0	3.95	—	—	良好	ヨコナデ、ミガ キ	ヨコナデ、縦方 向のナデ						底面 ミガキ	14
p.10 第12図	15	攪乱坑①	土師器 壺	—	(6.0)	—	—	—	良好	タタキ ナデ	工具による斜・ 縦方向のナデ 縦 ナデ						底面 ナデ	20
	22	I	土師器 壺	—	—	—	—	—	良好	ヨコナデ、連続 貼り付突帯、斜 方向のナデ	斜方向のナデ、 ヨコナデ							20

新土土: A:宮崎小石 長石・石英・C:黒石・角閃石 雲母 黒炭

第3表 第2地点出土陶磁器観察表

高取目 図版番号	遺構等	種別	器種	法量 cm ( ) 程度			産地	時期	備考	実測 番号
				口径	高さ	器高				
p.9 第10図	3	SE1	白磁	壺	(9.7)	0.63	2.45	肥前系	15C	4
	4	SE1	磁器	菊皿	(13.9)	—	—	肥前系	17C	7
	5	SE1	磁器	委付皿	(11.2)	—	—	肥前系	18C～19C	4
	6	SE1	磁器	壺	(9.4)	(4.7)	6.6	—	内外面 貫入あり	2
	9	SE1	青磁	輪花皿	(12.0)	5.8	3.35	電泉系?	14C 後～16C	6
	16	攪乱坑①	青磁	輪花皿	(11.3)	(6.0)	3.2	—	外面 貫入あり 青磁か?	13
p.10 第12図	17	攪乱坑①	磁器	委付 皿	8.35	6.5	6.6	肥前系	18C 後～19C	2
	18	攪乱坑①	磁器	碗	(7.6)	0.5	6.45	肥前系	18C 後半	22
	19	攪乱坑①	磁器	委付 小片	(2.7)	—	—	肥前系	17C～18C	11
	20	攪乱坑①	磁器	仏花瓶	(1.5)	3.6	10.45	肥前系	19C?	28
	23	I	陶器	壺	—	4.4	—	肥前系	17C 前半	25
	24	I	磁器	委付皿	(9.9)	(4.1)	5.4	肥前系	19C?	21
25	I	磁器	委付 皿	(25.2)	—	—	—	内面 貫入あり	23	
26	I	陶器	壺	(28.5)	—	—	—	—	26	

※( ) は残存法量

第4表 第2地点出土土製品観察表

高取目 図版番号	遺構等	種別	器種	法量 cm ( ) 程度			産地	時期	備考	実測 番号
				口径	高さ	器高				
p.10 第12図	21	攪乱坑①	土製品 土人形	—	—	—	—	—	—	27

第5表 第2地点出土石器観察表

高取目 図版番号	番号	遺構等	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測 番号
p.9 第11図	10	SE1	磁石	砂岩	8.80	8.30	5.80	814.0	—	17
p.10 第12図	27	I	磁石	凝灰岩	10.30	8.45	4.65	690.0	尾山山麓性岩	24

※( ) は残存法量



調査区全景（東から）



調査区全景（西から）



2号構状遺構完掘状況



## 第三章 第3地点の調査成果

### 第1節 調査に至る経緯

平成27年度に民間事業者から宅地造成に伴って、宮崎市大字島之内萩崎7671-2について埋蔵文化財の有無について照会がなされた。周辺には保木下遺跡や島之内萩崎第2遺跡（現：島之内萩崎遺跡第2地点）などが存在しており、当該地にも埋蔵文化財が存在する可能性があったので試掘調査を行った。その結果、埋蔵文化財が確認されたため事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地の「島之内萩崎第3遺跡（現：島之内萩崎遺跡第3地点）」としてその取扱いについて協議することとなった。事業者と埋蔵文化財の保存について調整を行ったが、今回の工事で埋蔵文化財の保存ができない範囲については記録保存のための発掘調査を行うこととなった。その調査面積は74㎡である。

### 第2節 弥生時代から古代の調査成果（第14図～第23図）

弥生時代中期から後期及び古墳時代初頭の遺物が出土した遺構として土坑7基が挙げられる。これらは調査区の西側に密集して検出されたが、後述する昭和初期の掘り込み（SK3）によって削平を受けており完全な形状を保持しているものはあまりなかった。その他には弥生中期から古墳時代の遺物が出土した溝状遺構4と古代の遺物が出土した溝状遺構12があげられる。

**土坑5（第14・15図）** 1.45m×1.1mの不整楕円形プランを呈する素掘りの土坑で、検出面からの深さは1.1mである。東側を削平されていたものの、床面付近からは砥石と共に土器がまとまって出土した（28～44）。28～35は甕形土器である。細かい刷毛目を施し、上げ底状の底部のものと同様にタタキを施したものが見られる。43は砂岩製の砥石である。一部に溝状の窪みがあり、そこに平滑面が確認される。44は軽石製品である。表面に多くの穴がみられる。

**土坑8（第16図）** 北側を大きく削平されており、北側の立ち上がりがなくなっていた。現状では1.06m×0.8mの不整円形プランを呈し、検出面からの深さは0.45mである。埋土中からは中期の弥生土器片（45～48）と軽石製品（49）が出土している。

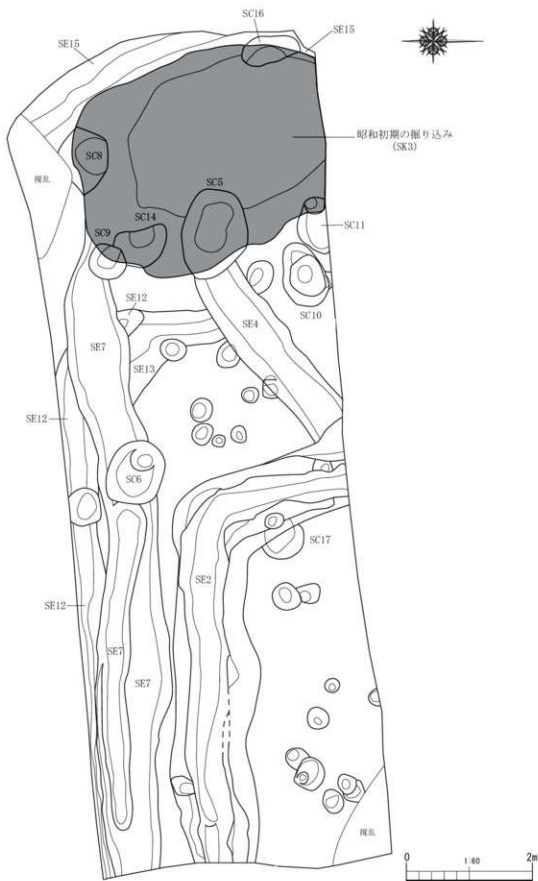
**土坑10（第17図）** この時期の遺構で唯一SK3に削平を受けなかったもので、1.04m×0.6mの不整楕円形プランを呈する。西側にテラス状の段が認められる。検出面からの深さは0.53mである。埋土中から弥生中期後半の土器片（50・51）が出土している。

**土坑11（第18図）** 西側に削平を受け、北側が調査区の外に出るため、形状がはっきりわからない。現状では0.92m×0.56+αmの不整楕円形プランを呈する。西側床面に柱穴状の掘り込みがある。そこまでの深さは検出面から0.49mである。埋土中に弥生中期～後期の土器片（52・53）が出土している。

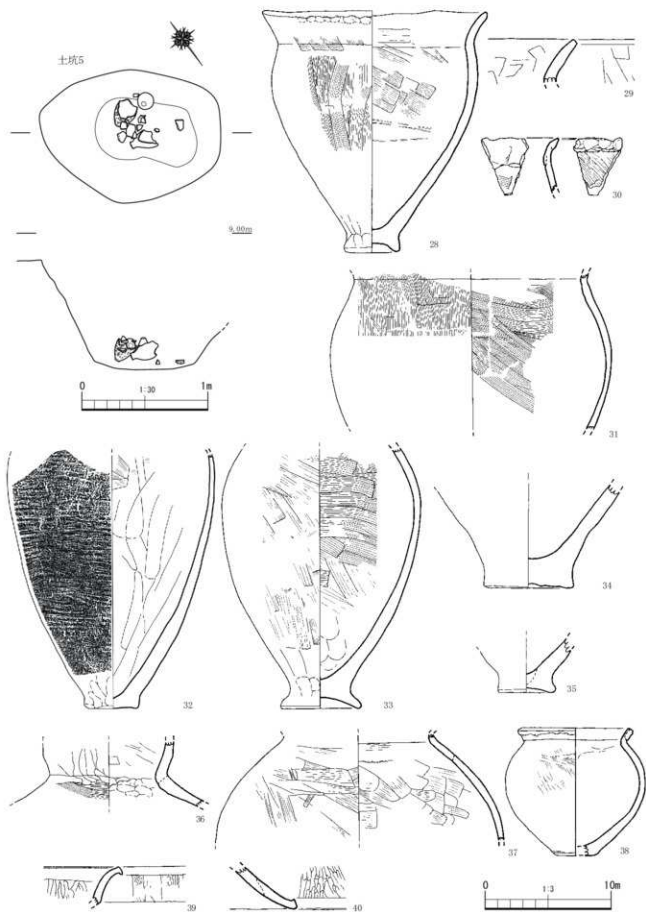
**土坑16（第19図）** 東側を削平されており、西側しか立ち上がりが残っていなかった。埋土中から弥生時代終末期～古墳時代前期の土器片（54～56）が出土している。検出面からの深さは0.28mである。55は二重口縁部の壺の破片で櫛描波状文が見られる。

**土坑9・土坑14（第20図）** 南北方向で切り合っている。両者ともに西側を大きく削平されており、東側しか立ち上がりは残っていなかった。検出面からの深さは土坑14が0.66m、土坑9が0.18mである。

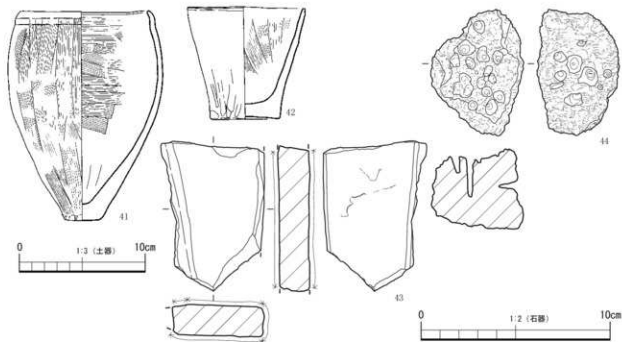




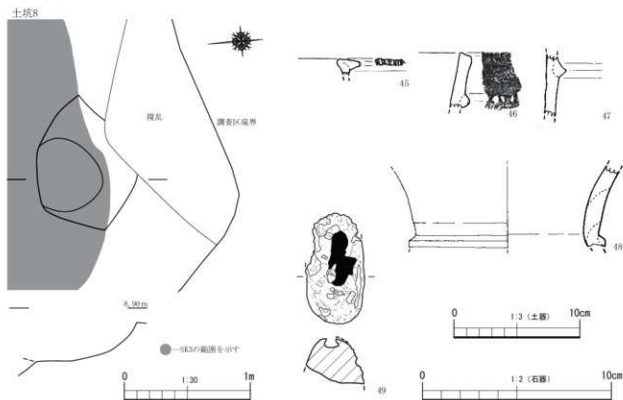
第13図 島之内萩崎遺跡第3地点遺構配置図(S=1/60)



第14图 土坑5实测图(S=1/30)・出土遗物实测图(S=1/3)

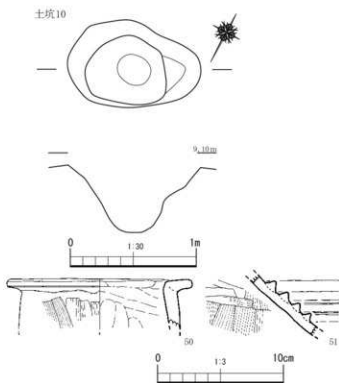


第15図 土坑5出土遺物実測図 (S=1/2・S=1/3)

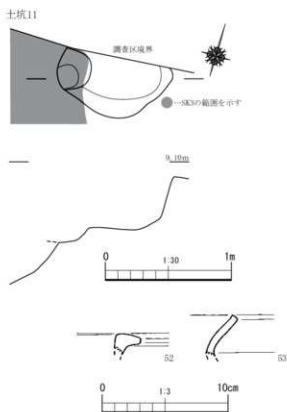


第16図 土坑8実測図(S=1/30)・出土遺物実測図 (S=1/2・S=1/3)

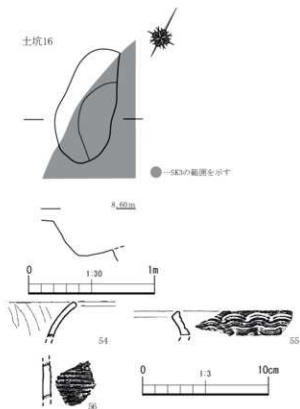
溝状遺構 4 (第 21・22 図) 南西～北東方向に伸びるもので、両端を土坑 5 や SK3、溝状遺構 2 に切られており、残存している長さは 3m で、幅は 0.7m、検出面からの深さは 0.25m である。断面形は不整形な逆台形状で遺構埋土は大きく 2 層に分かれており、その上層から多くの弥生土器片が出土している。出土した土器 (57～79) は中期中葉～終末期まで幅広いものである。64



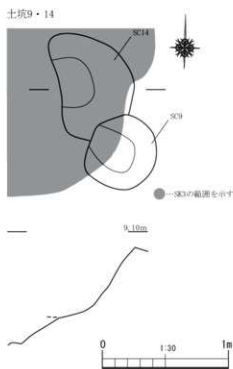
第17図 土坑10実測図 (S=1/30)  
・出土遺物実測図 (S=1/3)



第18図 土坑11実測図 (S=1/30)  
・出土遺物実測図 (S=1/3)

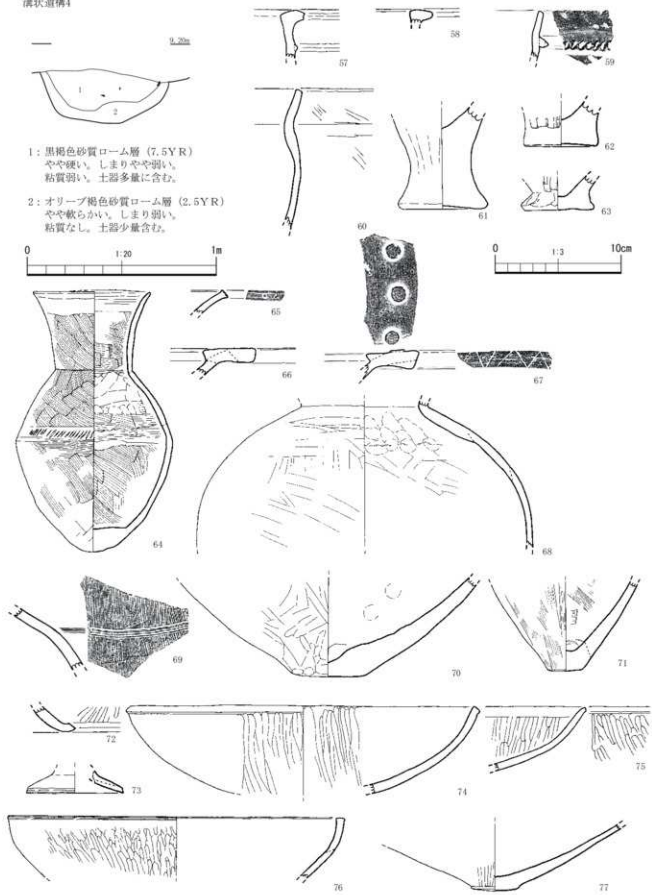


第19図 土坑16実測図 (S=1/30)  
・出土遺物実測図 (S=1/3)



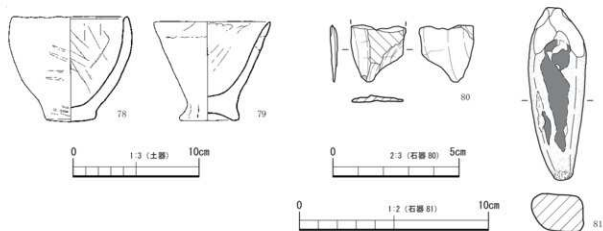
第20図 土坑9・14実測図 (S=1/30)

溝状遺構4

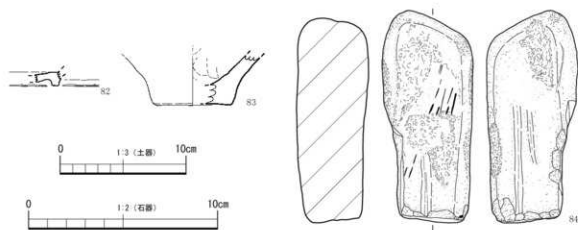


- 1: 黒褐色砂質ローム層 (7.5YR)  
やや硬い。しまりやや弱い。  
粘質弱い。土器多量に含む。
- 2: オリーブ褐色砂質ローム層 (2.5YR)  
やや軟らかい。しまり弱い。  
粘質なし。土器少量含む。

第21図 溝状遺構4土層断面図(S=1/20)・出土遺物実測図①(S=1/3)



第22図 溝状遺構4出土遺物実測図② (S=1/2・S=2/3・S=1/3)



第23図 溝状遺構12下層出土遺物実測図 (S=1/2・S=1/3)

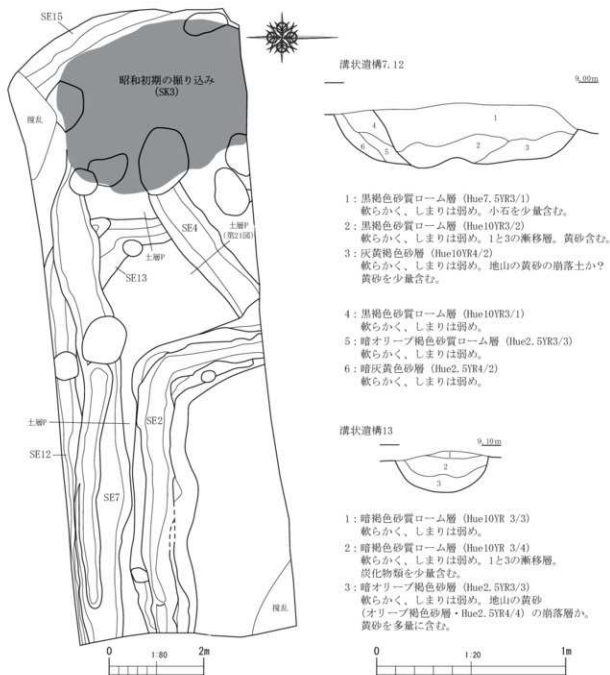
は長頸壺である。胴部の屈曲が弱くなり、尖底を呈している。66・67は鋤崎状の口縁部で、外面に赤色顔料が薄く付着している。67には円形浮文が見られる。74は内面に二次的な焼成を受けていると考えられる。その他に剥片(80)と敲石(81)が出土している。

**溝状遺構 12 (第 23・24 図)** 東～西方向に伸びる溝状遺構で、北側を近世の溝状遺構 7 に切られているため、幅は 0.4m 程度しか確認できなかった。埋土からは古代の土師器片(82・83)、赤化した砂岩製の敲石(84)が出土している。

### 第 3 節 近世の調査成果 (第 24 図～第 27 図)

調査区の中央部にあり、途中で屈曲する溝状遺構 2 と前述の溝状遺構 12 を切ってほぼ並行する溝状遺構 7 が検出されている。また調査区の南端で遺構検出面の上に堆積していた褐色砂質土から近世の陶磁器が多く出土しているので、合わせてここで報告を行う。

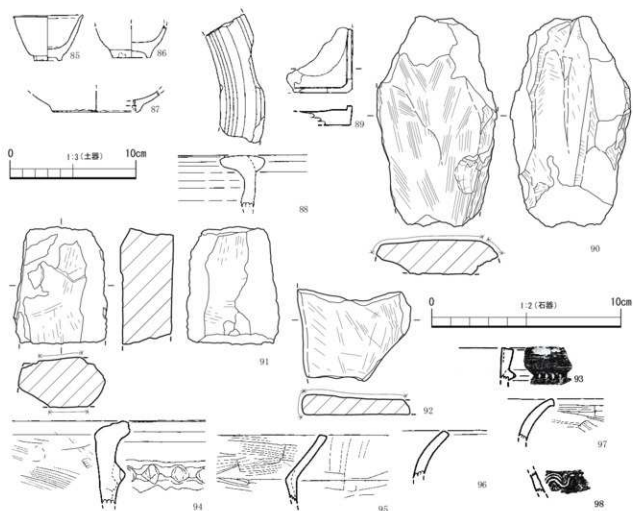
**溝状遺構 2 (第 24・25 図)** 調査区東端から西へ 5.5m の辺りで北にカーブして調査区の外に伸びるもので、幅は 1.1 ～ 1.3m、深さは 1.4 ～ 1.6m で二段掘りを呈する。埋土中から近世の陶磁器片(85～88)、硯破片(89)、弥生土器片(93～98)、砥石(90～92)が出土している。



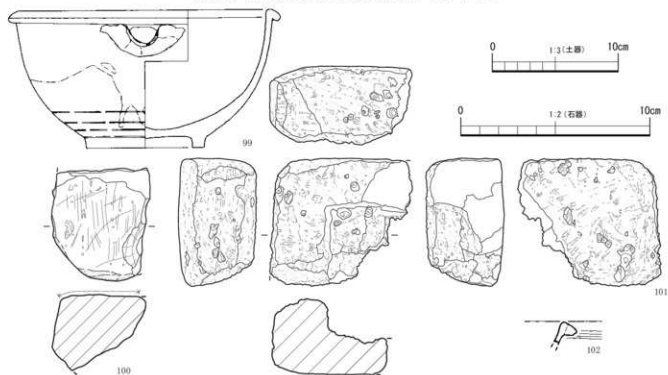
第24図 第3地点溝状遺構配置図(S=1/80)・土層断面図(S=1/20)

**溝状遺構 7 (第 24・26 図)** 調査区東端から西方向へ長さ 10m 検出されており、西端は SK3 に切られている。幅は 1 ～ 1.2m で深さは 0.3m である。床面はやや不整形であり、掘り返しが行われたことが想定される。埋土中からは鉄軸を使用する陶器の片口鉢 (99)、砥石 (100)、軽石製品 (101)、弥生土器片 (102) が出土している。

**遺物包含層出土遺物 (第 27 図)** 103 ～ 120 は調査区南側の遺物包含層から出土した近世の陶磁器片である。概ね 17 世紀後半から 18 世紀代の肥前系のものばかりで、特に小杯が目立つ (103 ～ 108)。115・116 は香炉で、118・119 は仏飯具、120 は備前焼の徳利である。

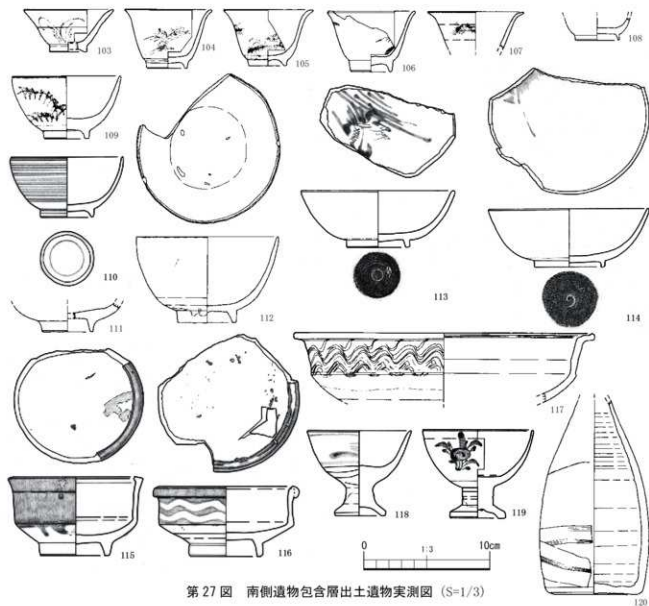


第25图 溝状遺構2出土遺物実測図 (S=1/2・S=1/3)



第26图 溝状遺構7出土遺物実測図 (S=1/2・S=1/3)



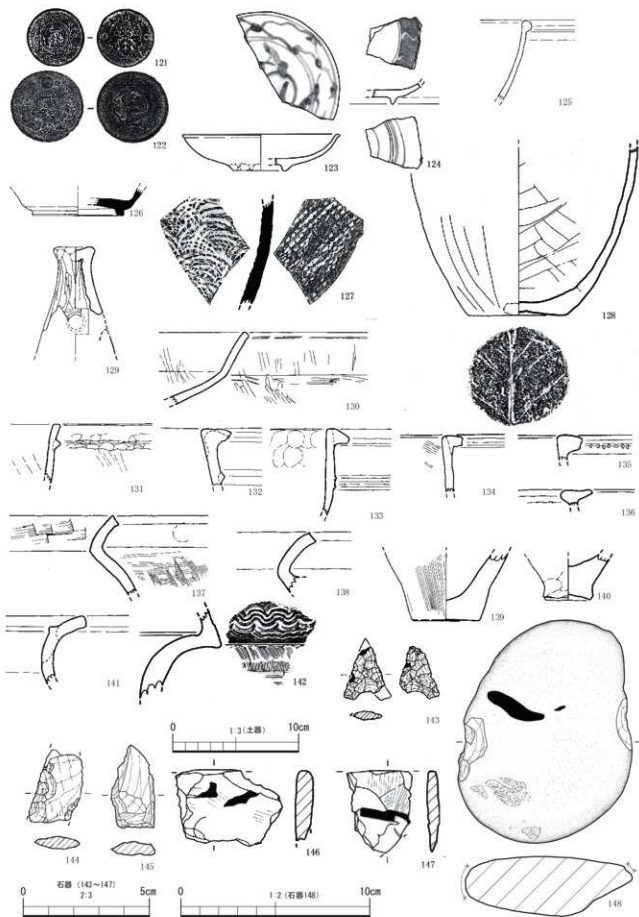


第27図 南側遺物包含層出土遺物実測図 (S=1/3)

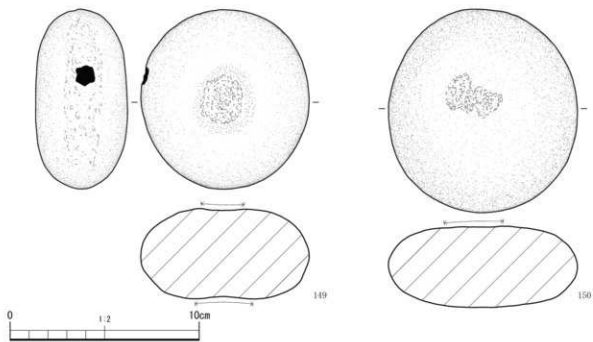
#### 第4節 その他

調査区の西側にあり、多くの遺構を削平していた巨大な掘り込み (SK3) は昭和11年の1銭銅貨 (121) が出土したことから戦前に掘られたものであることが明らかになった。埋土からは弥生時代から明治までの多くの遺物が混在していた。その他にも調査区内には多くの遺物が散布していた。その主なものについて以下に述べる。

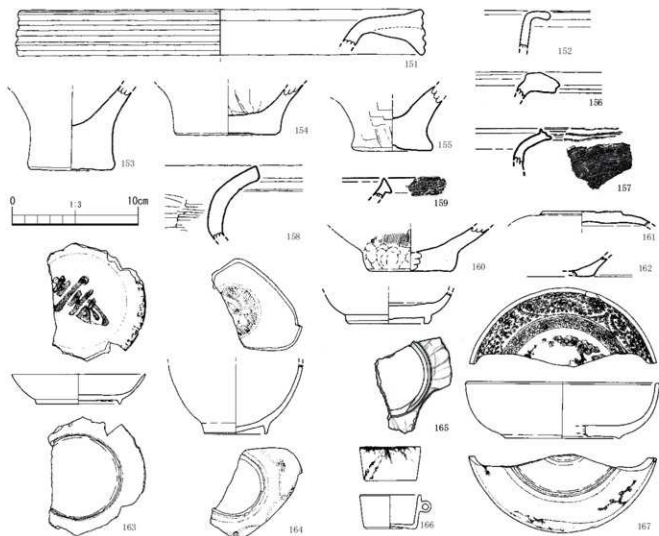
121～150はSK3からの出土遺物である。129は穿孔があり、高坏の脚部のように見えるが端部は生きており、器台のような資料と推測される。143は姫島産黒曜石の打製石鏃で、本来は弥生時代に帰属すると考えられる。146・147は石包丁の破片である。151～173は調査区内での採集品や試掘調査での出土資料である。151は試掘調査で出土した器台の口縁部片である。152は赤色顔料が入られていた可能性があり、内面に大量に付着している。156は凹線文土器の口縁部辺である。163・164は青花である。170は「上山醫院」と銘のあるガラス瓶である。172・173は五輪塔の水輪部分で両者ともに墨書で梵字が書かれている。



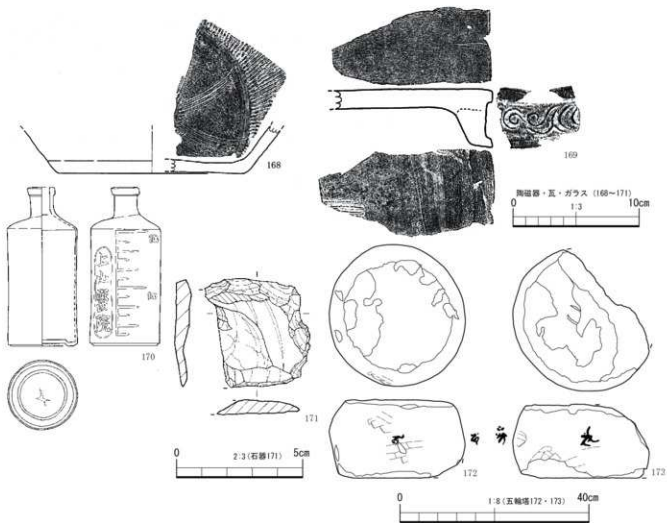
第28图 SK3出土遺物実測図① (S=1/2・S=2/3・S=1/3)



第29図 SK3出土遺物実測図② (S=1/2)



第30図 第3地点試掘調査・採集遺物実測図 (S=1/3)



第31図 第3地点採集遺物実測図 (S=2/3・S=1/3・S=1/8)

第6表 第3地点出土土器観察表①

発掘行 面番号	番号	遺構等	種別	法量 口径	口径	高さ	色調		構成	調査		新土(上1mm F1位)					備考	実測 番号	
							外面	内面		外面	内面	A	B	C	D	E			
上16 面1456	28	SC5-SK3	土師器 壺	17.4	4.25	19.15	にぶい・黄褐色 10195/3	にぶい・黄褐色 10195/3	良好	ナデ・指押さ え・ハケ目	ハケ目 ナデ						底面 ナデ 指押さえ 新土 陶灰 5mm / 少	69	
	29	SC5	土師器 壺	-	-	-	黄 5196/6	にぶい・黄 5196/4	良好	工具ナデ	工具ナデ						新土 陶灰 3mm / 多	31	
	30	SC5	土師器 壺	-	-	-	にぶい・黄褐色 10195/3	にぶい・黄 2, 5196/4	良好	ハケ目	ハケ目 ナデ						新土 陶灰 2mm / 少	34	
	31	SC5	土師器 壺	-	-	-	にぶい・黄褐色 7, 5195/3	にぶい・黄 7, 5195/3	良好	縦方向のハケ 目	ハケ目						内外面 朱紅色 外面 スス付着 新土 陶灰 3mm / 少	33	
	32	SC5	土師器 壺	-	4.1	-	にぶい・黄褐色 10195/3	灰黄褐色 10195/2	良好	多少な・多少 な指ナデ・ナ デ	ハケ目後指ナ デ・指押さえ						外面 黄褐色 底面 ナデ 指押さえ 新土 陶灰 2mm / 多	71	
	33	SC5	土師器 壺	-	6.1	-	灰黄褐色 10195/2	灰黄褐色 10194/2	良好	ハケ目・工具 ナデ・指押さ え	ハケ目 指ナデ	0.5 盛				内面 黒面 底面 ナデ 新土 陶灰 3mm / 少	72		
	34	SC5-SK3	土師器 壺・甕	-	7.1	-	にぶい・黄褐色 10195/3	明褐色 5197/1	良好	ナデ	ナデ						底面 ナデ 新土 陶灰 3mm / 多	70	
	35	SC5	土師器 壺	-	4.0	-	灰褐色 5194/2	にぶい・黄褐色 10195/3	不良	ナデ	ナデ	1 少					底面 ナデ 新土 陶灰 3.5mm / 多	30	
	36	SC5	土師器 壺	-	-	-	にぶい・黄褐色 7, 5196/4	にぶい・黄 7, 5196/4	良好	ナデ・工具ナ デ・指押さえ ・ハケ目	斜方向のナデ・ 指押さえ						新土 陶灰 3mm / 少	29	
	37	SE4-SC3	土師器 壺	-	-	-	黄 5196/6	明褐色 5197/2	良好	ハケ目 ナデ	ハケ目 ナデ	1 少					新土 陶灰 2mm / 多	10	
	38	SE4-SC3	土師器 壺	(8.4)	(3.0)	10.05	にぶい・黄 7, 5196/4	黄 7, 5194/3	良好	ナデ ハケ目	指ナデ ナデ	1 盛					底面 ナデ 新土 陶灰 1mm / 少	5	
	39	SC5	土師器 高坏	-	-	-	にぶい・黄褐色 7, 5196/4	にぶい・黄 7, 5196/4	良好	縦方向のハケ 目・ナデ	ミガキ ナデ			1 多			新土 陶灰 5mm / 少	32	
	40	SC5	土師器 高坏	-	-	-	にぶい・黄褐色 7, 5195/3	にぶい・黄 7, 5195/4	良好	ミガキ ナデ	ヨコナデ	1 小					新土 陶灰 2mm / 多	27	
	上17 面1506	41	SC5	土師器 鉢	(10.0)	2.95	16.6	にぶい・黄褐色 10196/4	灰黄褐色 10195/2	良好	ナデ・縦方向 のハケ目	横方向のハケ 目・ナデ						底面 指押さえ後ナデ 新土 陶灰 3mm / 盛	73

中胎土 A: 宮崎小石 B: 長石・石黄 C: 輝石・角閃石 D: 雲母 E: 黒炭

第7表 第3地点出土土器観察表(2)

表紙 図説番号	器種	種類	口径	高さ	底径	色		地成	調査					備考	表紙 図説番号				
						裏面			外面		新土(上:1mm下:1mm)								
						内面	外面		A	B	C	D	E						
p.17 第15図	42	SC5	床面	9.3	5.4	8.9	にぶい焼 7.536/4	にぶい焼 7.535/4	良好	ココナデ、羅方 向のナデ後ココ ナデ、ミガキ		1	1				底面 ナデ 新土 焼土2mm/多	74	
	45	SC8	甕	-	-	-	にぶい黄焼 10386/3	にぶい焼 7.535/3	良好	ナデ	ナデ		2	多			口縁部 キズ目 新土 焼土2mm/少	37	
p.17 第16図	46	SC8	甕	-	-	-	灰黄 2.537/2	灰黄 2.537/2	良好	ナデ	ナデ						新土 焼土3mm/僅	36	
	47	SC8	甕	-	-	-	灰黄焼 10385/2	にぶい黄焼 10385/3	良好	ナデ 貼付変態	ナデ						新土 焼土4mm/多	35	
	48	SC8	甕	-	-	-	にぶい黄焼 10387/3	にぶい黄焼 10386/3	良好	ナデ 貼付変態	ナデ		0.5	1.5	多		新土 焼土5mm/少	38	
	50	SC10	甕 (14.0)	-	-	-	にぶい黄焼 10385/3	10385/3	良好	ナデ ハク目	ナデ 指押さえ						新土 焼土1.5mm/少	40	
p.18 第17図	51	SC10	甕	-	-	-	にぶい焼 7.538/3	にぶい焼 7.538/4	良好	ナデ 貼付変態	ナデ						新土 焼土5mm/少	39	
	52	SC11	甕	-	-	-	にぶい黄焼 10386/3	にぶい黄焼 10386/3	良好	ナデ	ナデ						口唇部 凹部 黒底 新土 焼土2mm/多	42	
p.18 第18図	53	SC11	甕	-	-	-	にぶい焼 7.538/3	にぶい焼 7.538/4	良好	ナデ	ナデ		2	少			新土 焼土2mm/多	43	
	54	SC16	甕・壺	-	-	-	灰焼 5385/2	明赤焼 2.5385/6	良好	ナデ	工具ナデ			0.5	僅		新土 焼土1mm/少	46	
p.18 第19図	55	SC16	甕	-	-	-	にぶい焼 7.5387/4	にぶい黄焼 10386/3	良好	縞縞状伏文	ナデ						新土 焼土2mm/少	44	
	56	SC16	土器部 壺・甕	-	-	-	灰焼 7.5384/1	にぶい黄焼 10385/4	良好	タタキ	ナデ			0.5	僅		新土 焼土1.5mm/少	45	
	57	SEA	甕	-	-	-	にぶい焼 7.5384/1	にぶい黄焼 10385/3	良好	ナデ 貼付変態	ナデ			1	僅		新土 焼土1mm/少	20	
	58	SEA	甕	-	-	-	にぶい焼 7.5386/1	灰焼 2.5385/2	良好	ナデ	ナデ							新土 焼土2mm/少	14
	59	SEA	甕	-	-	-	にぶい焼 7.5385/3	にぶい焼 2.5386/4	良好	ナデ、貼付変態 にキズ目	ナデ							新土 焼土1mm/少	22
	60	SEA	甕	-	-	-	にぶい焼 7.5386/3	10386/3	良好	ナデ 工具ナデ	ナデ							外面 スス付着 新土 焼土1mm/多	8
	61	SEA	甕・壺	-	7.2	-	にぶい黄焼 10385/3	灰焼 7.5384/2	良好	ナデ 工具ナデ	ナデ			1	僅		底面 ナデ 新土 焼土2mm/多	17	
	62	SEA	土器部 壺・甕	-	6.0	-	にぶい赤焼 5385/4	黒焼 10383/1	良好	ナデ ハク目 ナデ	ナデ			1	少		新土 焼土3mm/多	16	
	63	SEA	土器部 壺	-	5.8	-	にぶい焼 7.5386/4	灰焼 10384/1	良好	ナデ ハク目 指押さえ	ナデ						底面 ナデ 指押さえ 新土 焼土3mm/少	15	
	64	SEA+一	甕	9.2	-	30.7	にぶい黄焼 10386/3	黒焼 5385/1	良好	ナデ、工具ナデ、 キズ目	ナデ、工具ナデ、 指押さえ				僅 少		外面 黒底 底面 ナデ 新土 焼土1mm/少	4	
	65	SEA	甕	-	-	-	にぶい黄焼 10387/4	灰白 2.5388/2	良好	ナデ	ナデ			3	僅		口唇部 条痕 刺突文	2	
	66	SEA	甕	-	-	-	灰黄焼 10385/2	にぶい赤焼 5385/3	良好	ナデ	ナデ			1	2		丹塗り 新土 焼土3mm/少	19	
	67	SEA	甕	-	-	-	灰黄焼 10385/2	灰焼 2.5385/2	良好	ナデ ハク目	ナデ			1.5	僅		口縁部外面 注線文 内面 浮文 新土 焼土5.5mm/多	21	
	68	SEA	土器部 壺	-	-	-	にぶい黄焼 10387/3	にぶい黄焼 10387/2	良好	工具ナデの後ナデ	工具ナデの後ナデ・ 指押さえ			2.5	少			新土 焼土5mm/多	9
	69	SEA	甕	-	-	-	灰黄焼 10385/2	にぶい赤焼 5385/4	良好	ハク目 注線	ナデ			1	少				24
	70	SEA	土器部 壺	-	5.8	-	にぶい赤焼 8385/4	にぶい焼 7.5385/4	やや良	ナデ、木釘方向 のタタキ	指押さえ ナデ			1	僅		底面 ナデ 黒底 新土 焼土2mm/少	25	
71	SE4+S83	土器部 高坪	-	2.7	-	黄灰 2.534/1	灰黄焼 10385/2	良好	ハク目	ナデの後ハク 目・指押さえ						底面 ナデ	12		
72	SEA	土器部 高坪	-	-	-	にぶい焼 7.5386/4	にぶい焼 7.5386/4	良好	ナデ ミガキ	ナデ			1	僅		内面 黒底 新土 焼土2mm/少	23		
73	SEA	甕	-	(7.0)	-	にぶい焼 7.5387/4	黄灰 2.534/1	良好	ナデ	ナデ						新土 焼土1.5mm/僅	18		
74	SE4+S87 +S813	甕 (28.0)	-	-	-	にぶい焼 7.5386/4	にぶい焼 2.5386/4	良好	ミガキ ハク目	ミガキ						外面 スス付着 新土 焼土2mm/多	3		
75	SEA	土器部 鉢	-	-	-	にぶい焼 7.5386/4	にぶい焼 2.5386/4	良好	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ			1	僅		新土 焼土2mm/少	11		
76	SEA	甕 浅鉢	36.0	-	-	黄灰 2.5386/6	明焼灰 5387/2	良好	ミガキ ナデ	ナデ			1	僅		新土 焼土2mm/多	1		
77	SEA+一	土器部 鉢	-	3.8	-	黄 5386/6	灰焼 7.5385/2	良好	ミガキ	ミガキ			1	多		内外面 黒底 底面 ミ ガキ 新土 焼土3mm/多	13		
p.20 第20図	78	SE4+SC5	甕	9.0	3.8	8.3	にぶい焼 7.5386/3	灰黄焼 10385/2	良好	タタキの後ナデ	工具ナデ (附り)		2	少			型打ち? 外面 黒底 底面 ナデ 新土 焼土2mm/少	7	
	79	SEA	土器部 坪	9.1	(4.0)	(7.8)	にぶい焼 7.5386/3	黄灰 2.534/1	良好	指ナデ	指ナデ 指押さえ						底面 ナデ 新土 焼土3mm/僅	6	
p.20 第21図	82	SE12	坪	-	-	-	明焼灰 5387/1	にぶい焼 7.5386/4	良好	ナデ	ナデ			1	少		底面 ナデ 新土 焼土1mm/少	62	
	83	SE12	土器部 壺・甕	-	6.3	-	にぶい赤焼 5385/4	黄灰 2.534/1	良好	ナデ	ナデ			1	少		底面 ナデ 黒底 新土 焼土2mm/多	63	
p.21 第22図	93	SE2 2片	甕	-	-	-	にぶい黄焼 10386/3	7.5386/4	良好	貼付変態にキズ 目・ナデ、ヨ コナデ	ナデ						外面 黒底 新土 焼土3mm/少	55	

表紙土 A: 青崎小石 B: 長石・石英 C: 輝石・角閃石 黄: 黄鉄 E: 黒炭

第8表 第3地点出土土器観察表(3)

調査可 図番号	番号	遺構 名	種別 器種	法量 口径	C( ) 底径	H( ) 高さ	色		焼成	調査					備考	実測 番号		
							外面	内面		調査		出土(上:mm下:層)						
										外面	内面	A	B	C			D	E
p.22 第208図	94	SE2 2区	弥生 壺	-	-	-	にぶい黄褐色 5YR5/4	にぶい赤褐色 2.5YR5/4	良好	胎付変態にキズ と目・ナデ	ナデ	工具ナデ	1 個				胎土 焼戻2mm/個	58
	95	SE2 2区	土師器 壺	-	-	-	にぶい黄褐色 7.5YR5/3	10YR5/3	良好	ナデ	ナデ	工具ナデ	1 少				胎土 焼戻3mm/多	54
	96	SE2	弥生 壺・倉	-	-	-	にぶい黄褐色 10YR5/3	10YR5/3	良好	ナデ	ナデ	ナデ					胎土 焼戻5.5mm/個	47
	97	SE2 2区	土師器 壺	-	-	-	にぶい黄褐色 5YR5/4	10YR5/3	良好	ナデ	ナデ	工具ナデ					胎土 焼戻2.5mm/少	53
	98	SE2 2区	弥生 壺	-	-	-	にぶい黄褐色 7.5YR5/4	にぶい黄褐色 2.5YR5/4	良好	輪縁波状文	ナデ							胎土 焼戻3mm/少
p.24 第209図	102	SE7	弥生 壺	-	-	-	灰褐色 7.5YR4/2	にぶい赤褐色 5YR5/3	良好	ナデ	ナデ	ナデ	2 少		1 多		胎土 焼戻1mm/少	60
	126	SK3	須恵器 杯	-	(7.0)	-	黄灰 2.5Y4/1	黄灰 2.5Y5/1	良好	回転ナデ	回転ナデ						底面 回転ナデ	93
	127	SK3	須恵器 壺・倉	-	-	-	褐色 10YR5/1	褐色 10YR5/1	良好	タタキ	タタキ (同心円文)						胎土 焼戻0.5mm/個	89
	128	SK3	土師器 壺	7.7	-	-	にぶい黄褐色 7.5YR5/4	黄褐色 2.5Y5/2	良好	工具ナデ	工具ナデ						内面 黒底 胎土 黒底 底面 胎土 胎土	94
	129	SK3	土師器 器台	-	-	-	にぶい黄褐色 10YR5/4	にぶい黄褐色 10YR5/3	良好	ナデ・胎押さえ ナデ	胎押さえ ナデ						胎土 焼戻1.5mm/多	88
	130	SK3	土師器 高杯	-	-	-	にぶい黄褐色 5YR5/4	にぶい黄褐色 2.5YR5/4	良好	ナデ・ハケ目の 後ノケ目・イ ガキ	ナデ イガキ						胎土 焼戻1mm/少	77
	131	SK3	弥生 壺	-	-	-	にぶい赤褐色 5YR5/3	にぶい赤褐色 5YR5/3	良好	ナデ 胎付変態 (つまみ)	ナデ						胎土 焼戻2mm/少	79
	132	SK3	弥生 壺	-	-	-	灰褐色 7.5YR4/2	にぶい黄褐色 10YR5/3	良好	ナデ	胎付変態	ナデ					口唇部 胎押さえ 胎土 胎土	76
	133	SK3	弥生 壺	-	-	-	にぶい黄褐色 10YR5/3	にぶい黄褐色 2.5YR5/4	良好	ナデ	胎付変態	ナデ					胎土 焼戻1.5mm/個	83
	134	SK3	弥生 壺	-	-	-	灰黄褐色 10YR5/2	にぶい黄褐色 2.5YR5/3	良好	ナデ	ナデ	工具ナデ					口唇部 胎押さえ 胎土 胎土	82
	135	SK3	弥生 壺	-	-	-	褐色 7.5YR4/1	にぶい黄褐色 2.5YR5/3	良好	キズと目突部 ナデ	ナデ					1 多	胎土 焼戻3mm/個	85
	136	SK3	弥生 壺	-	-	-	褐色 10YR5/1	灰黄褐色 10YR5/2	良好	ナデ	ナデ						胎土 焼戻1mm/少	84
	137	SK3	弥生 壺	-	-	-	にぶい黄褐色 7.5YR5/4	にぶい黄褐色 2.5YR5/4	良好	ナデ・ハケ目・ 縦方向のナデ	ハケ目 ナデ						胎土 焼戻4mm/多	81
138	SK3	弥生 壺	-	-	-	にぶい黄褐色 7.5YR5/4	にぶい黄褐色 10YR5/4	良好	ナデ	ココナデ						胎土 焼戻3mm/個	80	
139	SK3	弥生 壺	(5.2)	-	-	灰黄褐色 10YR5/3	灰黄褐色 10YR5/2	良好	ハケ目	ナデ						底面 ナデ 胎土 焼戻1.5mm/少	86	
140	SK3	弥生 壺	-	3.4	-	灰黄褐色 10YR5/2	にぶい黄褐色 2.5YR5/3	良好	ナデ	胎押さえ	ナデ					底面 ナデ 胎土 焼戻3mm/少	87	
141	SK3	弥生 壺	-	-	-	灰黄褐色 10YR4/2	にぶい赤褐色 5YR5/3	良好	ナデ	ナデ						胎土 戻4.5mm/個	78	
142	SK3	弥生 器台	-	-	-	にぶい黄褐色 10YR5/3	にぶい黄褐色 10YR5/3	良好	輪縁波状文・胎 押さえの後ナ デ・ハケ目	ナデ						胎土 焼戻4mm/個	75	
p.25 第210図	151	SK16	弥生 器台	(31.6)	-	-	褐色 7.5YR5/6	褐色 7.5YR5/6	良好	胎押さえ	ナデ					5 少	胎土 胎土	158
	152	一統	弥生 壺	-	-	-	灰白 10YR7/1	明褐色 2.5YR7/1	良好	ナデ	ナデ						胎土 焼戻1mm/少	96
	153	一統	弥生 壺	-	(6.4)	-	にぶい黄褐色 10YR5/3	灰褐色 2.5YR5/2	良好	ナデ	ナデ						底面 ナデ 胎土 焼戻4mm/多	101
	154	一統	弥生 壺	-	8.4	-	にぶい黄褐色 7.5YR5/3	赤灰 2.5YR4/1	良好	ナデ	ナデ						内外面 胎付金帯 底面 ナデ 胎土 胎土	107
	155	一統	弥生 壺	-	6.2	-	灰褐色 7.5YR5/2	にぶい赤褐色 5YR5/3	良好	ハケ目の後ナデ	ナデ						底面 ナデ 胎土 焼戻3mm/多	100
	156	一統	弥生 壺	-	-	-	にぶい黄褐色 7.5YR5/3	灰褐色 2.5YR5/2	良好	工具ナデ	ナデ						口唇部 胎押さえ 胎土 胎土	97
	157	一統	弥生 壺	-	-	-	にぶい黄褐色 7.5YR5/3	にぶい黄褐色 2.5YR5/4	良好	ハケ目	ナデ						口唇部 胎押さえ	98
	158	一統	弥生 壺	-	-	-	にぶい黄褐色 7.5YR5/2	灰褐色 2.5YR5/2	良好	ナデ	ナデ	ハケ目					胎土 焼戻2.5mm/個	95
	159	一統	弥生 壺	-	-	-	にぶい赤褐色 2.5YR5/4	にぶい赤褐色 10YR5/3	良好	ナデ	波状文	ナデ					胎土 焼戻2mm/少	99
	160	一統	土師器 壺	-	(6.8)	-	にぶい黄褐色 7.5YR5/3	褐色 10YR4/1	良好	工具ナデ	胎押さえ	ナデ					内面 黒底 底面 工具ナデ 胎土 胎土 胎土	102
161	一統	須恵器 壺	-	(6.2)	-	灰黄褐色 10YR5/2	灰黄褐色 10YR5/2	良好	回転へラ切り ナデ	ナデ						胎土 焼戻2mm/少	104	
162	一統	土師器 杯	-	-	-	にぶい黄褐色 5YR5/4	にぶい黄褐色 5YR5/4	良好	回転ナデ	回転ナデ						底面へラ切り 胎土 焼戻1mm/少	103	
169	一統	瓦 軒手瓦	-	-	-	褐色 10YR4/1	黄灰 2.5Y4/1	良好	工具ナデ	ナデ						胎土 焼戻2mm/個	114	

胎土: A: 官燭小石 B: 長石 C: 石英 D: 輝石 E: 角閃石 F: 雲母 G: 黒炭

第9表 第3地点出土陶磁器観察表

調査区 図番号	番号	遺構等	種別	器種	法量 cm ( ) : 次元			産地	時期	備考	実測 番号
					口径	口径	器高				
p. 22 第25区	85	SE2 2区	磁器	小坪	(15.0)	2.2	3.6	肥前	17C代?		49
	86	SE2 1区	磁器	小坪	—	0.0	—	肥前系	17C前	覆付 砂目	48
	87	SE2 2区	白磁	碗	—	06.1	—				56
	88	SE2 3区	陶器	鉢	—	—	—				59
p. 22 第26区	99	SE7 3区	陶器	片口鉢	(20.3)	0.5	11.1	肥前			61
	103	南朝瓦層	磁器	小坪	(7.1)	0.0	3.4	肥前系	17C後		128
	104	南朝瓦層	磁器	小坪	6.75	3.5	4.7	肥前系	17C後～18C前	覆付 砂目	127
	105	南朝瓦層	磁器	小坪	(7.0)	0.0	4.45	肥前系	17C後～18C前		129
	106	南朝瓦層	磁器	小坪	(6.8)	3.2	4.8	肥前系	1700～1760?		123
	107	南朝瓦層	磁器	器口	(7.6)	—	—	肥前系	1680～1740?	外面 染付	124
	108	南朝瓦層	白磁	小瓶	—	3.4	—	肥前系			121
	109	南朝瓦層	磁器	小瓶	(8.5)	3.4	4.9	肥前系	18C代		125
	110	南朝瓦層	磁器	湯呑細	8.8	4.2	4.8	肥前		外面 染付 高台内面 細線 覆付 砂目	131
	111	南朝瓦層	陶器	碗	—	(4.1)	—				133
p. 23 第27区	112	南朝瓦層	青磁	碗	11.5	4.6	6.9	肥前			116
	113	南朝瓦層	陶器	碗	(12.0)	4.9	4.5	肥前系	17C後?	内面 扇形筋 山水文 高台内面 刻印	130
	114	南朝瓦層	陶器	碗	12.5	5.5	4.6	肥前系		高台内面 刻印	117
	115	南朝瓦層	陶器	香炉	(10.8)	5.5	6.2	肥前	1650～1690		132
	116	南朝瓦層	陶器	香炉	(11.35)	5.55	5.5	肥前	1650～1690?		138
	117	南朝瓦層	陶器	火入	(23.6)	—	—	肥前系	17C中～後	外面 蓋状文	126
	118	南朝瓦層	磁器	仏教器	(8.2)	(3.9)	6.65	肥前系	1650～1690?	外面 染付	122
	119	南朝瓦層	磁器	仏教器	8.6	4.4	7.0	肥前系	1690～1780代?	外面 花文様 染付	120
	120	南朝瓦層	陶器	燈台	—	6.4	—	備前系			119
	123	SK3	磁器	皿	(12.2)	(4.3)	2.9	肥前系	17C前半	覆付 砂目?	90
p. 24 第28区	124	SK3	磁器	皿	—	—	—	肥前系	17C後半以降?		91
	125	SK3	陶器	鉢	—	—	—				92
	163	一括	青花	皿	(10.4)	(6.6)	2.3	16C末～17C初			109
p. 25 第30区	164	一括	青磁	碗	—	(4.9)	—	16C後～末	外面 細線 見込 細線 覆付 砂目		110
	165	一括	青磁	碗	—	(6.3)	—	16C前～中	見込 刻印(不明線) 扇形筋		111
	166	一括	磁器	器口	4.65	3.9	2.7		外面 岩の染付 鳥かごに限定する鳥の模		112
	167	一括	磁器	皿	(15.1)	(8.5)	4.25	肥前	1780～1900?	青花	108
p. 26 第31区	168	一括	陶器	磁鉢	—	(15.2)	—	堺・明石系			106

※ ( ) は残存法量

第10表 第3地点出土石器・石製品・土製品・ガラス製品観察表

調査区 図番号	番号	遺構等	器種	石材(素材)	長さ (cm)		厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測 番号
					縦	幅				
p. 17 第15区	43	SK5 床面	砥石	砂岩	7.9	5.5	1.7	116.6	表裏面に溝	134
	44	SK5	不明	軽石	6.65	4.9	4.2	24.2		135
p. 17 第16区	49	SK8	不明	軽石	5.85	3.1	2.4	8.0		136
p. 20 第22区	80	SE4	削片	頁岩	2.25	2.15	0.3	1.9	磨製石器の破片?	140
	81	SE4	砥石	砂岩	9.1	3.05	1.95	99.6		141
p. 20 第23区	94	SE12	砥石	砂岩	11.2	4.8	3.8	337.6		144
	89	SE2	礎	土質	(5.5)	(5.4)	1.6	(37.3)		57
	90	SE2	砥石	頁岩	11.1	6.35	1.8	163.3		137
p. 22 第25区	91	SE2	砥石	砂岩	6.2	4.9	2.6	125.0		138
	92	SE2	砥石	砂岩	4.9	6.0	1.05	43.8		139
	100	SE7	砥石	砂岩	6.0	5.2	4.0	154.5		143
	101	SE7	不明	軽石	6.75	7.55	4.0	39.6		142
p. 24 第26区	143	SK3	打製石器	礫島産準礫石	(2.1)	(1.6)	(0.35)	(0.7)	尖嘴部・側部欠損	148
	144	SK3	削片	結晶片岩	2.9	2.15	0.5	4.3		150
	145	SK3	削片	結晶片岩	3.25	1.75	0.5	3.8		149
	146	SK3	石包丁	ホルンフェルス	4.25	3.0	0.75	12.0	刃部・両端部欠損	153
	147	SK3	石包丁	緑板岩	3.25	2.55	0.5	5.1	両端部欠損	152
	148	SK3	石鏝	砂岩	11.8	9.2	3.15	424.9	打欠	147
p. 25 第29区	149	SK3	砥石	尾跡山礫性岩	9.5	8.9	4.8	629.7		145
	150	SK3	砥石	尾跡山礫性岩	10.7	10.0	4.3	743.6		146
	170	一括	瓶	ガラス	12.7	5.6	5.6	84.2	「上山園児」口縁部径 2.2cm	135
p. 26 第31区	171	一括	削片	緑色準礫岩	4.35	4.25	0.65	13.5		151
	172	一括	五輪帯	凝灰岩	30.2	30.2	16.6	12290	水輪 ほぼ完全2ヶ所に欠字	157
	173	一括	五輪帯	凝灰岩	(31.0)	31.0	15.6	9790	水輪 残存部2ヶ所に欠字	156

※ ( ) は残存法量

第11表 第3地点出土金属製品観察表

調査区 図番号	番号	遺構等	器種	素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測 番号
p. 24 第28区	121	SK3	一括銅鏡	銅	2.35	2.35	0.14	3.5	昭和十一年	155
	122	SK3	一括銅鏡	銅	2.8	2.8	0.13	6.5	明治九年 鏡	154

※ ( ) は残存法量



調査区全景（南東から）

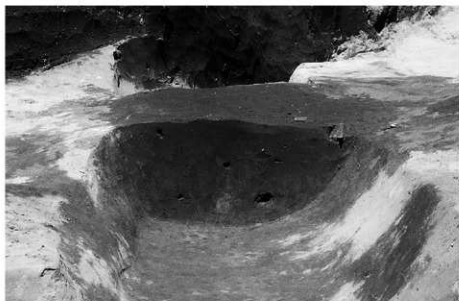


溝状遺構 4 検出（北東から）



溝状遺構 4 完掘（北東から）





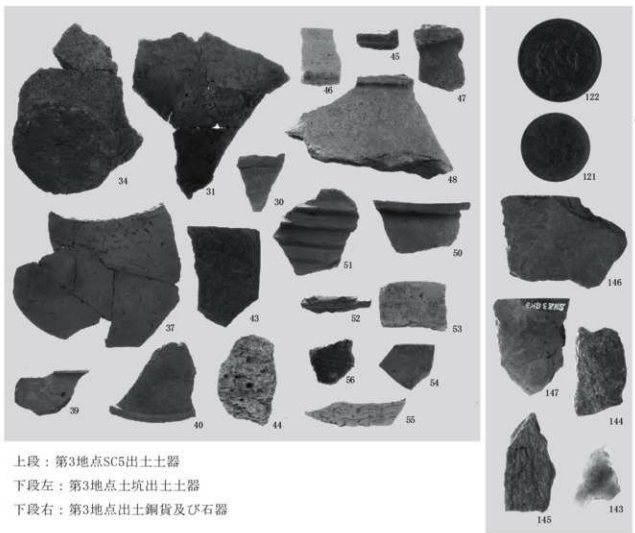
溝状遺構 4 土層断面



土坑 5 (北から)



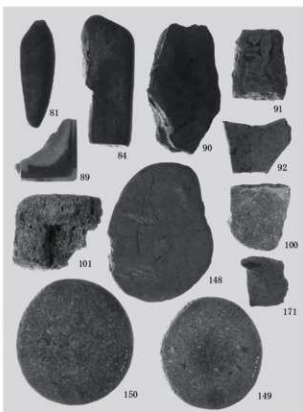
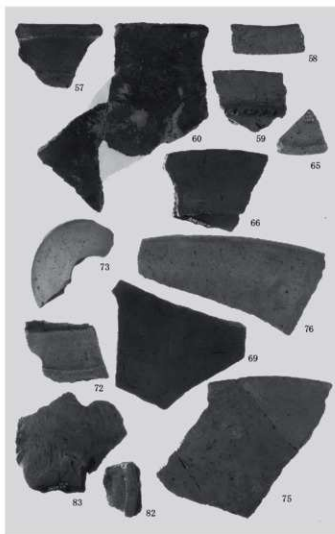
土坑 5  
遺物出土状況 (北東から)



上段：第3地点SC5出土土器

下段左：第3地点土坑出土土器

下段右：第3地点出土銅貨及び石器



上段：第3地点SK5·SE4出土弥生土器

下段左：第3地点沟状遺構出土土器

下段右：第3地点出土石器



上段：第3地点出土陶磁器

下段左：第3地点採集弥生土器

下段右：第3地点採集及び

試掘調査出土弥生土器

## 第IV章 第5地点の調査成果

### 第1節 調査に至る経緯

平成28年1月12日、民間事業者より大字島之内字萩崎7703番2外における埋蔵文化財の有無について、本市文化財課宛てに照会がなされた。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地「島之内萩崎第4遺跡」の隣接地にあたることから、平成29年6月29日から30日に事前の試掘調査を実施した。調査の結果、事業地内には地山砂層上面で遺構、遺物が残存していることが明らかとなり、島之内萩崎第4遺跡の範囲を拡大し、新規の埋蔵文化財包蔵地として登録された。この結果を受けて、文化財課と民間事業者との間で埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を重ねた結果、市道に編入される予定の道路部分350㎡について、記録保存を目的とした本発掘調査を実施するに至った。なお、本報告時点での遺跡名及び地点名の変更については第I章のとおりである。

本発掘調査は、平成31年3月12日から令和元年6月5日に実施した。本発掘調査の総面積は221.6㎡、発掘調査の延べ日数は33日である。整理作業は宮崎市埋蔵文化財センターで行ない、令和元年度から4年度にかけて実施した。

調査地は、西側が下田島I面の砂丘、東側が河成段丘となり、土質が大きく異なっている。西側の砂丘部分（調査区南壁）の基本層序は以下の通りである。

A I層（18cm）表土。

A II層（22cm）暗褐色（10YR3/3）。細砂。砂礫、ガラス等を含む現代の堆積層。

A III層（5cm）暗褐色（10YR3/3）。細砂。暗オリーブ褐色砂ブロックを含む。

A IV層（22cm）暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）。砂。オリーブ褐色砂ブロックを含む。

A V層（5cm以上）オリーブ褐色（2.5Y4/4）。砂。黄褐色砂がまだら状に混ざる。

調査地の現地地形は平坦だが、北側では地表面から0.1m弱（A I層直下）で、遺構検出面であるA V層が検出されたことから、旧地形は北から南に向かって傾斜する地形であったことが分かる。また、東側河成段丘部（北壁）の基本層序は以下のとおりである。

B I層（8cm）表土。

B II層（20cm）現代造成土。

B III層（19cm）黒褐色（10YR2/3）。粘土。0.5mmの軽石を多く含む。

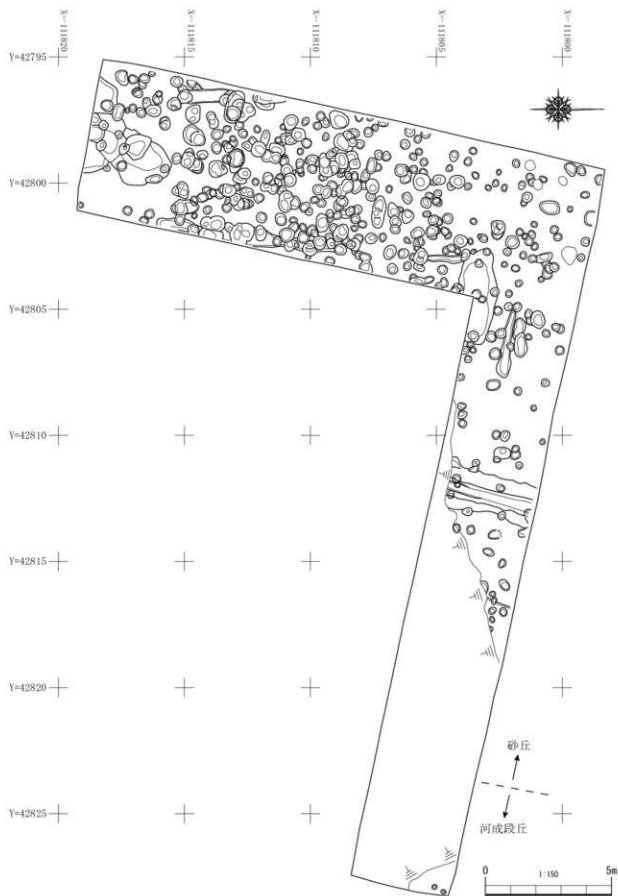
B IV層（17cm）暗褐色（10YR3/4）。粘土。B V層ブロックをまだら状に含む。

B V層（15cm以上）浅黄色（10YR8/3）。粘土。鉄分がまだら状に混ざる。

主な遺構として、弥生時代の溝状遺構1条、掘立柱建物2棟、中世から近世の掘立柱建物11棟、土坑3基、溝状遺構3条を検出した。また、調査区北東隅部では弥生時代の遺物包含層が確認された（第32図）。

### 第2節 弥生時代の調査成果

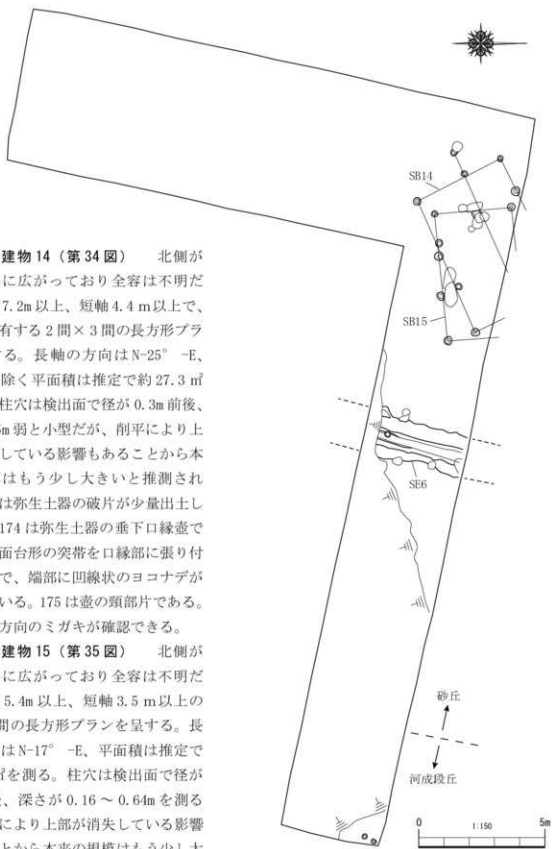
A V層上面で、暗褐色シルトを埋土とする掘立柱建物2棟、溝状遺構1条が検出された（第33図）。柱穴は、埋土が溝状遺構6と類似すること、後世の遺物が出土しないことから弥生時代の柱穴として認定した。調査区北東隅部では、B IV層上面から掘り込む柱穴2基が検出された。また、B III層とB IV層は遺物包含層であり、弥生土器片が出土した。



第32図 島之内萩崎遺跡第5地点遺構配置図(S=1/150)

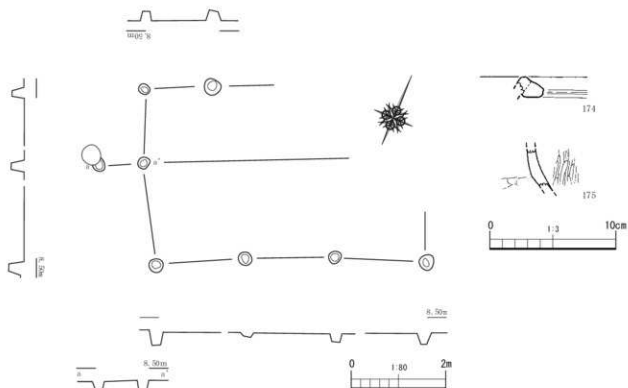
**掘立柱建物 14 (第 34 図)** 北側が調査区外に広がっており全容は不明だが、長軸 7.2m 以上、短軸 4.4 m 以上で、棟持柱を有する 2 間×3 間の長方形プランを呈する。長軸の方向は N-25° -E、棟持柱を除く平面積は推定で約 27.3 m<sup>2</sup> を測る。柱穴は検出面で径が 0.3m 前後、深さ 0.35m 弱と小型だが、削平により上部が消失している影響もあることから本来の規模はもう少し大きいと推測される。遺物は弥生土器の破片が少量出土している。174 は弥生土器の垂下口縁壺である。断面台形の突帯を口縁部に張り付けるもので、端部に凹線状のヨコナデが施されている。175 は壺の頸部片である。外面に縦方向のミガキが確認できる。

**掘立柱建物 15 (第 35 図)** 北側が調査区外に広がっており全容は不明だが、長軸 5.4m 以上、短軸 3.5 m 以上の 2 間×3 間の長方形プランを呈する。長軸の方向は N-17° -E、平面積は推定で約 18.9 m<sup>2</sup> を測る。柱穴は検出面で径が 0.3m 前後、深さが 0.16 ~ 0.64m を測るが、削平により上部が消失している影響もあることから本来の規模はもう少し大きいと推測される。

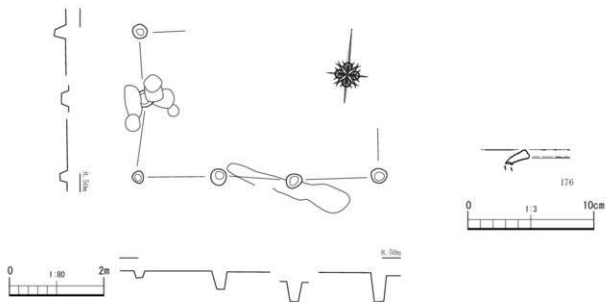


第33図 第5地点弥生時代主要遺構配置図 (S=1/150)

遺物は弥生土器の破片が少量出土している。176は東北部九州系のく字口縁甕である。口縁部が強く屈曲する形態で、屈曲部から口縁端部にかけて太くなる断面形状を呈し、端部はヨコナデによる平坦面を有する。

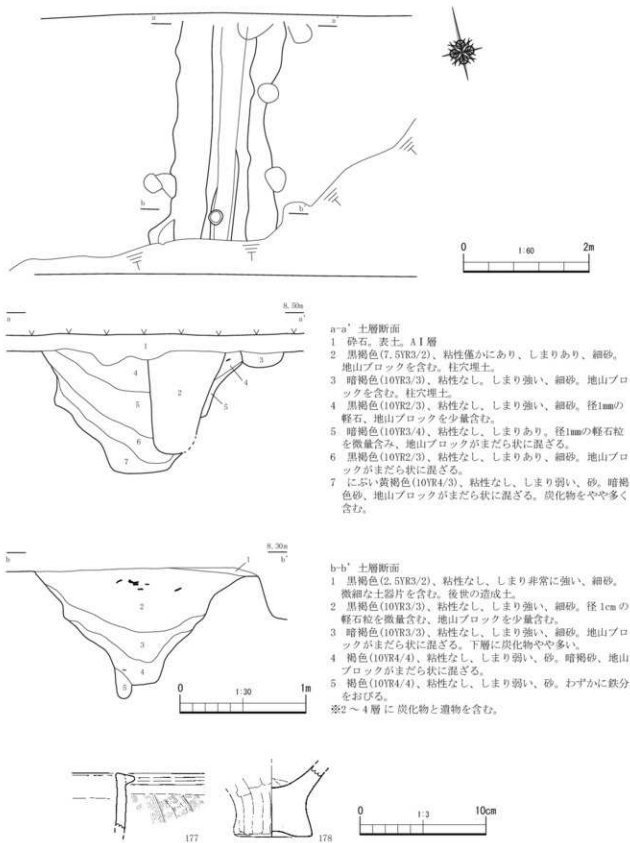


第34図 掘立柱建物14実測図 (S=1/80)・出土遺物実測図 (S=1/3)

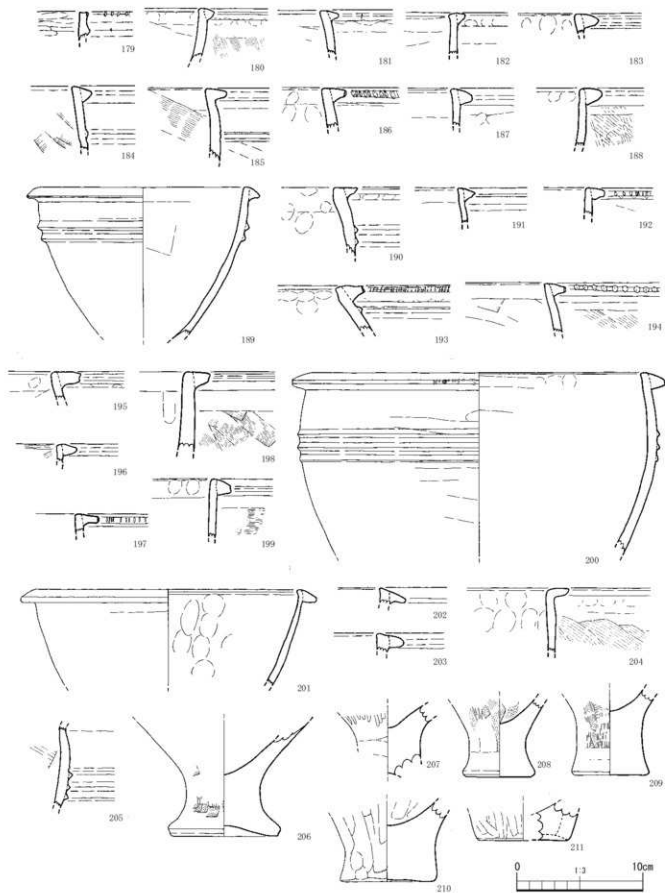


第35図 掘立柱建物15実測図 (S=1/80)・出土遺物実測図 (S=1/3)

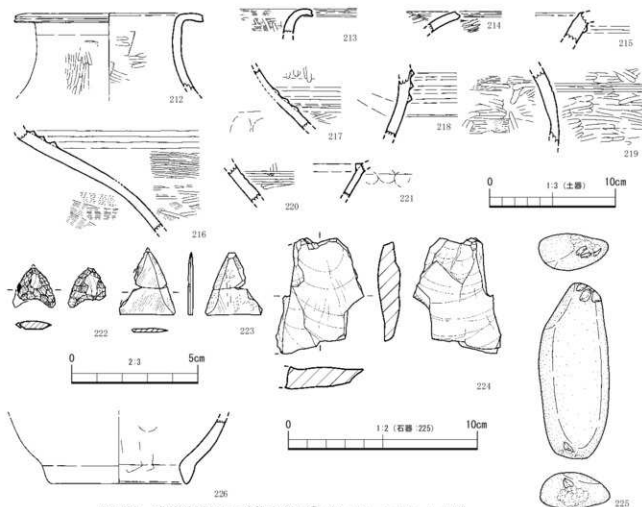




第36図 溝状遺構6実測図・出土遺物実測図①(S=1/60・1/30・1/3)



第37图 溝状遺構6出土遺物実測図② (S=1/3)



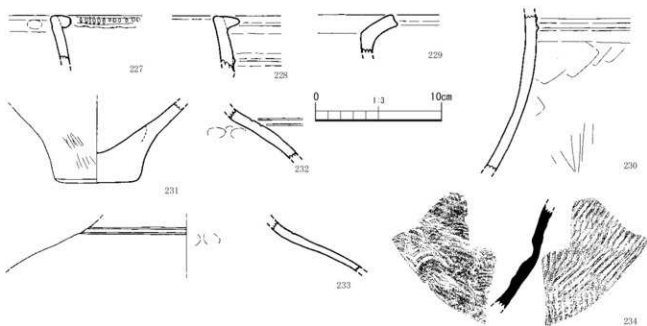
第38図 溝状遺構6出土遺物実測図③ (S=1/2・S=2/3・S=1/3)

2棟の建物は柱穴の重複が無いことから直接の前後関係は把握できないが、出土遺物は中期中頃から後半(河野2~3期;河野2013)のものであることから、近接した時期に建替えが行われたと考えられる。

**溝状遺構6(第36図)** 調査区北側で検出された。検出面での最大幅1.7m、深さ0.9mの断面逆台形を呈する。南側が現代の攪乱で破壊されている他、後世の遺構が重複している。調査区内ではほぼ南北方向に伸びており、事前の試掘調査の結果からは調査区の北側で西側へ向けて緩く方向転換する可能性があり、環濠となる可能性が高い。埋土は黒褐色または暗褐色の砂を主体とし、土層断面では西側からの土砂の堆積が顕著に認められる。西側に掘削土を盛り上げた堤が存在したためと考えられる。また、a-a'断面6層下面、b-b'断面3層下面で掘り返しの痕跡が認められる。

b-b'断面の床面では、小穴が1基検出された。断面観察で埋土の5層を4層が被覆していることから、溝埋没以前の小穴と認定した。木製橋等の構造物が存在した可能性もあるが、調査範囲が狭いことから詳細は不明である。

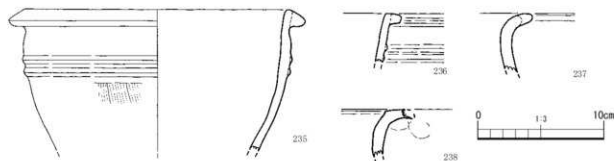
埋土中には上層から下層にかけて弥生土器、石器等の遺物が包含されており、特にb-b'断面の2層中、標高約8.0mの付近に破片が集中する箇所がある。また、b-b'断面の4層中位でも数点の遺物と炭化物がほぼ同レベルで検出された。埋土中の遺物は埋土一括、上層(b-b')



第39図 溝状遺構6上層出土遺物実測図 (S=1/3)

断面2層相当)、下層(b-b'断面4層相当)に分けて取り上げを行った。底面直上では遺物は出土していない。177から178は下層出土遺物であり、溝状遺構6の構築時から、土層断面で把握される掘り返しが行われるまでの間に廃棄された遺物と判断される(第36図)。177は亀ノ甲系甕であり、外面には煤の付着が認められる。178は甕底部である。断面が厚く、外底面が上げ底状を呈する。外面は縦方向の工具ナデが認められる。これらの下層出土遺物はいずれも弥生時代前期末(2c期; 柴畑2006)の特徴を有する。

179から225は埋土一括遺物である(第37から38図)。179は口縁部下に小さな三角突帯を張り付ける下城式甕である。口縁端部に工具による刻目が施されるが、突帯には施文されない。180から182は亀ノ甲系甕である。183から189は突帯貼付けにより断面三角形の口縁部を呈する入来I式甕である。190から195、198から200は口縁端部にヨコナデによる凹みまたは平坦面を有し、断面台形を呈する入来II式甕である。190と191は突帯が小さく断面も三角形に近いが、端部に凹線状の凹みを有することから入来II式に分類した。192から194、196には端部に工具による刻目が施される。200にも工具による刻目が認められるが、部分的にしか施されず全周しない。193は口縁部直下に1条の三角突帯を巡らせる。196は小さな断面三角形の口縁部を持つ甕である。部分的にミガキが施され、胎土に金雲母を含むことから西部瀬戸内系とみられる。197は口縁部に断面長方形の突帯を張り付け、端部に工具による刻目を施す甕である。胎土に石英・長石や金雲母を含み、暗い色調を呈することから外来系の搬入品と考えられる。201から202は鉢の口縁部である。203は甕または鉢の口縁部である。外来系甕の模倣土器の可能性はある。204は折り曲げ成形により口縁部を屈曲させる甕または鉢である。205は甕の胴部片である。206から211は甕の底部である。206と207は外底面が上げ底になる脚台状底部である。208から209は脚台状底部である。210は断面形状が厚い平底である。211は下城式甕の底部の可能性のある破片である。212から215は壺口縁部片である。215は口縁部下位に三角突帯を巡らせる壺の口縁部と考えられる。口縁部内面にも突帯状の段を有している。216から220は壺の胴部



第40図 第5地点包含層出土遺物実測図 (S=1/3)

片である。221は鉢の口縁部と考えられる破片である。口縁部内面に三角突帯を1条巡らせており、豊後系鉢の可能性はある。

222から225は石器である。222は姫島産黒曜石の打製石鎌である。223は頁岩の磨製石鎌である。224は頁岩の剥片である。磨製石器の素材剥片と考えられる。225は砂岩製破石である。226は土師器甕であり、溝状遺構6に重複する古墳時代以降の柱穴に属する遺物である。

227から234は上層出土遺物である(第39図)。227は亀ノ甲系甕である。突帯下端の貼り付け痕を明瞭に残しており、朝鮮系無文土器甕の影響を受けた可能性がある。228は入来Ⅰ式甕の口縁部である。229は甕口縁部である。230は入来式甕の胴部片である。231は壺の底部である。232と233は壺の胴部片である。234は須恵器甕の胴部片である。溝状遺構6に重複する古墳時代以降の柱穴に属する遺物である。

**包含層出土遺物(第40図)** 調査区北東端部のBⅢ層とBⅣ層中から出土した遺物である。235は入来Ⅰ式甕である。236は入来Ⅱ式甕である。237は壺口縁部である。238は下城式壺の口縁部である。

### 第3節 中世から近世の調査成果

AⅤ層上面で、中世以降の柱穴404基、溝状遺構3条、土坑3基が検出された(第41図)。特に調査区西側では遺構の重複が激しく、明確に前後関係を判断できなかった柱穴もある。柱穴のうち、掘立柱建物として11棟を認定したが、調査区が狭いことや遺構の重複が激しいことから、本来はさらに建物が存在したと考えられる。

**掘立柱建物16(第42図)** 東側が調査区外に広がっており全容は不明だが、長軸6m、短軸2.3m以上で、1間以上×3間の長方形プランを呈すると考えられる。長軸の方向は $W-89^{\circ}-N$ 、柱穴は検出面で径が0.4m前後を測る。柱穴から遺物が少量出土した。239は柱穴出土遺物で、白色チャート製の基石である。

**掘立柱建物17(第43図)** 東側が調査区外に広がっており全容は不明だが、長軸4.4m以上、短軸4.7mで、2間×2間以上の長方形プランを呈すると考えられる。長軸の方向は $N-89^{\circ}-E$ 、柱穴は検出面で径が0.66m前後を測る。柱穴から遺物が少量出土した。240は鉄釘である。断面が方形の和釘である。241は銅銭である。風化しており銭種は不明である。242は弥生土器の壺口縁部片である。口縁部内面に三角突帯を巡らせる壺と考えられる。

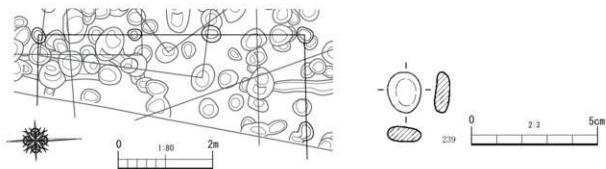
**掘立柱建物18(第44図)** 西側が調査区外に広がっており全容は不明だが、短軸3.8m、長



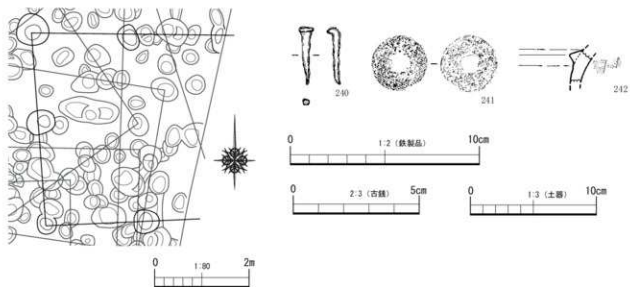
軸 5.3 m 以上で、2 間×3 間以上の長方形プランを呈すると考えられる。長軸の方向は  $N-82^{\circ}-W$ 、柱穴は検出面で径が 0.74m 前後を測る。柱穴から遺物が少量出土した。243 は刀子の可能性がある板状鉄製品である。244 は鉄釘である。断面が方形の和釘である。245 は洪武通寶である。246 は須恵器甕の胴部片である。

**掘立柱建物 19 (第 45 図)** 西側が調査区外に広がっており全容は不明だが、短軸 3.6m、長軸 5.5 m 以上で、2 間×3 間の長方形プランを呈すると考えられる。平面積は推定で約 19.8  $m^2$ 、長軸の方向は  $N-58^{\circ}-E$ 、柱穴は検出面で径が 0.56m 前後を測る。柱穴から遺物が一定量出土した。247 は龍泉窯青磁碗である。外面に細蓮弁文が施される續編年の VI 類古相 (續 2022) に該当する。248 は回転ヘラ切り底の土師器杯である。堀田編年の X 1 期 (堀田 2016) に該当する。249 から 251 底部回転ヘラ切りの土師器杯の底部片である。252 と 253 は板状鉄製品である。木質が付着しており、刀子の可能性がある。254 と 255 は洪武通寶である。254 は裏面に「福」の字を入れた福建省産である。256 は弥生土器の壺

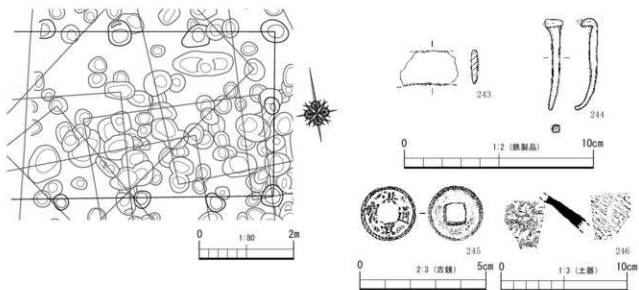
第41図 第5地点中世・近世主要遺構配置図 (S=1/150)



第42図 掘立柱建物16実測図(S=1/80)・出土遺物実測図(S=1/3)



第43図 掘立柱建物17実測図(S=1/80)・出土遺物実測図(S=1/2・2/3・1/3)

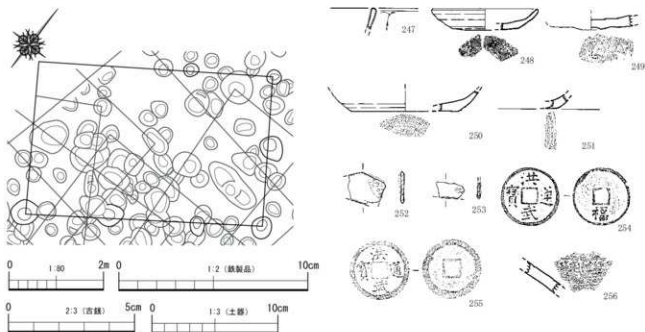


第44図 掘立柱建物18実測図(S=1/80)・出土遺物実測図(S=1/2・2/3・1/3)

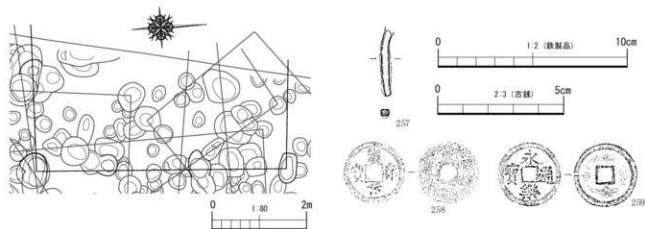
胴部片である。肩部に半裁竹管文を連続して施している。また、竹管文の上下には回転台を利用した短沈線状の刻線が認められる。胎土も在来のものとは異なることから、他地域からの搬入土器と考えられる。

**掘立柱建物 20 (第46図)** 西側が調査区外に広がっており全容は不明だが、短軸3.8m、長軸5.3m以上で、2間×3間以上の長方形プランを呈すると考えられる。長軸の方向はN-3°-E、柱穴は検出面で径が0.62m前後を測る。柱穴から遺物が少量出土した。257は鉄釘である。掘立柱建物21を構成する柱穴195と接合したが、どちらの建物に伴うかは正確には不明だが、掘立柱建物20の遺物として報告しておく。258と259は同一の柱穴内から出土した銅銭である。258は聖宋元寶、259は永樂通寶である。

**掘立柱建物 21 (第47図)** 西側が調査区外に広がっており全容は不明だが、3間×3間の方形プランを呈すると考えられる。一辺が5.4m×5.7mを測り、平面積は推定で約30.7㎡を測る。



第45図 掘立柱建物19実測図(S=1/80)・出土遺物実測図(S=1/2・2/3・1/3)



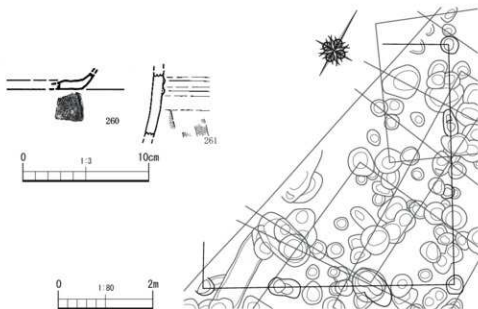
第46図 掘立柱建物20実測図(S=1/80)・出土遺物実測図(S=1/2・2/3)



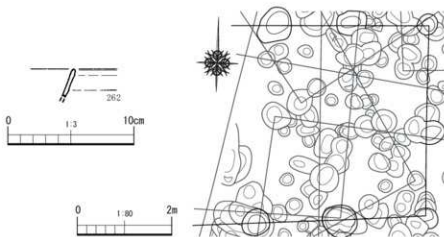
建物の主軸はN-31°-W、柱穴は検出面で径が0.36m前後を測る。柱穴から遺物が少量出土した。260は土師器杯の底部片である。外底面は回転ヘラ切りである。261は弥生土器甕の胴部片である。外面に2条の三角突帯が巡らされており、煤の付着が認められる。

**据立柱建物22（第48図）** 西側が調査区外に広がっており全容は不明だが、短軸4.5m以上、長軸5m以上で、2間×3間以上の長方形プランを呈すると考えられる。長軸の方向はN-1°-E、柱穴は検出面で径が0.86m前後を測る。柱穴から遺物が少量出土した。262は土師器杯口縁部片である。

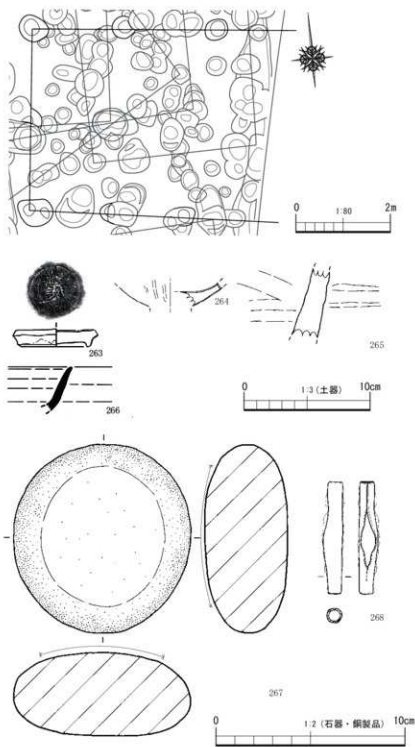
**据立柱建物23（第49図）** 東側が調査区外に広がっており全容は不明だが、短軸4.4m以上、長軸5.5m以上で、2間×3間以上の長方形プランを呈すると考えられる。長軸の方向はN-84°-W、柱穴は検出面で径が0.64m前後を測る。柱穴から遺物が一定量出土した。263は龍泉窯青磁皿である。見込みは釉剥きされ刻印が認められる。また、側面を打ち欠いて円盤状に再加工している。續編年のVI類に該当する。264は龍泉窯青磁碗である。外面に蓮弁文が認められ、底部は



第47図 据立柱建物21実測図(S=1/80)・出土遺物実測図(S=1/3)



第48図 据立柱建物22実測図(S=1/80)・出土遺物実測図(S=1/3)



第49図 掘立柱建物23実測図(S=1/80)・出土遺物実測図(S=1/2・1/3)

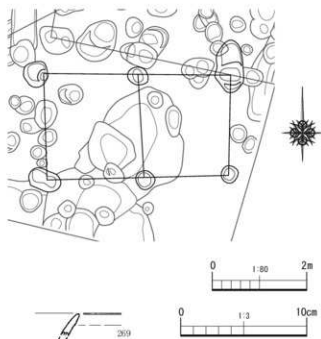
片である。端反の浅い器形を呈するもので、森田 E-2 類 (森田 1982) に該当する。

**掘立柱建物 26 (第 52 図)** 短軸 4.1m、長軸 6.5 m で、2 間×3 間の長方形プランを呈する。長軸の方向は  $N-0^{\circ}-E$ 、柱穴は検出面で径が 0.6m 前後、平面積は推定で約 26.6  $m^2$  を測る。柱穴から遺物が少量出土した。271 は青花染付皿の口縁部片である。染付皿 E 群 (小野 1982) に該当する。272 はチャート製火打石である。

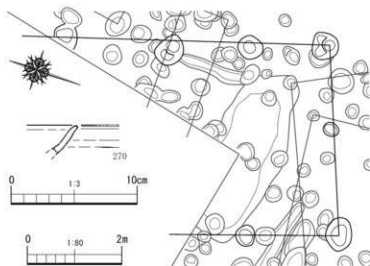
厚い。續編年の V 類末相から VI 類に相当するものか。265 は陶器製の胴部片である。備前焼と考えられる。266 は奈良・平安時代の須恵器坏である。267 は尾鈴酸性岩製の磨石である。268 は筒状鉄製品である。板状の鉄製品を折り曲げて筒状に成形している。

**掘立柱建物 24 (第 50 図)** 短軸 2.7m、長軸 4.4 m で、1 間×2 間の長方形プランを呈する小型の建物である。長軸の方向は  $N-89^{\circ}-E$ 、柱穴は検出面で径が 0.56m 前後、平面積は推定で約 11.8  $m^2$  を測る。北東角の柱穴は 2 段掘り状を呈しており、柱抜き取り時の掘り返し痕の可能性ある。柱穴から遺物が少量出土した。269 は土師器杯の口縁部片である。

**掘立柱建物 25 (第 51 図)** 南側が調査区外に広がっており全容は不明だが、短軸 4.6m 以上、長軸 6.1 m 以上で、2 間×3 間以上の長方形プランを呈すると考えられる。長軸の方向は  $N-18^{\circ}-W$ 、柱穴は検出面で径 0.74m 前後を測る。柱穴から遺物が少量出土した。270 は白磁皿の口縁部



第50図 掘立柱建物24実測図(S=1/80)・出土遺物実測図(S=1/3)



第51図 掘立柱建物25実測図(S=1/80)・出土遺物実測図(S=1/3)

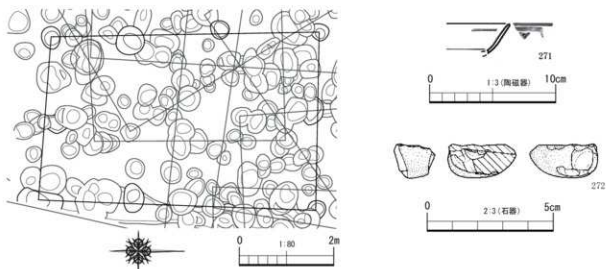
ここで検出面から0.22mを測る。掘立柱建物25の柱穴に切られているため中世以前の遺構と判断されるが、埋土中から少量の遺物しか出土しておらず詳細な時期は不明である。278は土師器甕の口縁部片である。279は古墳時代前期の鉢である。280は土師器杯口縁部片である。

**土坑13(第55図)** 調査区北部で検出された。北側が調査区外に広がり、東側と南側は擾乱により削平されているため全体形状は不明だが、方形プランを呈する可能性がある。検出面から底面まで0.04m程度しか残存しておらず、遺物も出土していないため詳細は不明である。

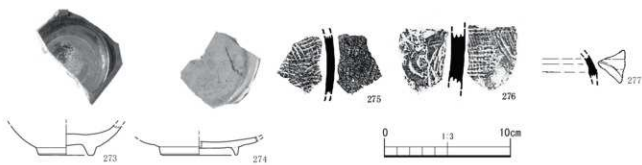
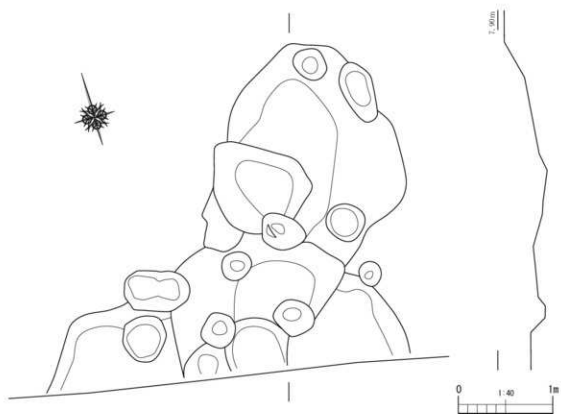
**溝状遺構(第56図)** 3条の溝状遺構を検出した。いずれも中世以前の溝と考えられる。土坑や柱穴が密に重複しているが、深さ0.1～0.15mの浅い溝である。遺物は少量出土したが、固化に耐えうるものはなかった。

**土坑5(第53図)** 南側が調査区外に広がっている。土坑が複数重複したような不整形の平面プランで、床面もいくつかの凹凸が認められるいびつな形状を呈する。検出段階で遺構の重複を想定し土層観察ベルトを残して掘削したものの、断面観察で明確な重複関係が認められなかったため、一つの土坑として報告する。南側壁面で東西3.9m、断面軸で南北3.4m以上、深さは最大0.33mを測る。埋土中から遺物が一定量出土した。273は陶器碗である。見込みが釉剥ぎされ畳付は露体している。274は染付皿である。内外面に圏線が描かれ、内底面は露体している。275から277は須恵器胴部片である。277は小破片で詳細は不明だが、丸みを帯びる胴部に浮文状の突起部が確認できる。

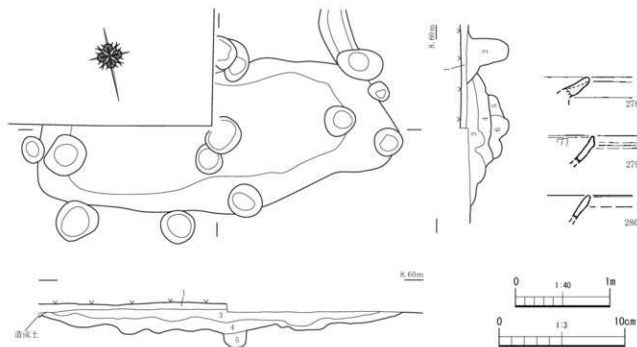
**土坑8(第54図)** 調査区中央部分で検出された。南西側が調査区外に広がっているが、長軸3.84m、短軸1.65mの不整形楕円形を呈する。断面形は浅いすり鉢状で、深さは最も深いと



第52図 掘立柱建物26実測図(S=1/80)・出土遺物実測図(S=1/2・2/3・1/3)

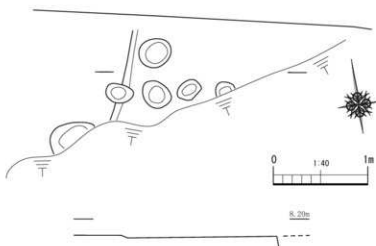


第53図 土坑5実測図(S=1/40)・出土遺物実測図(S=1/3)



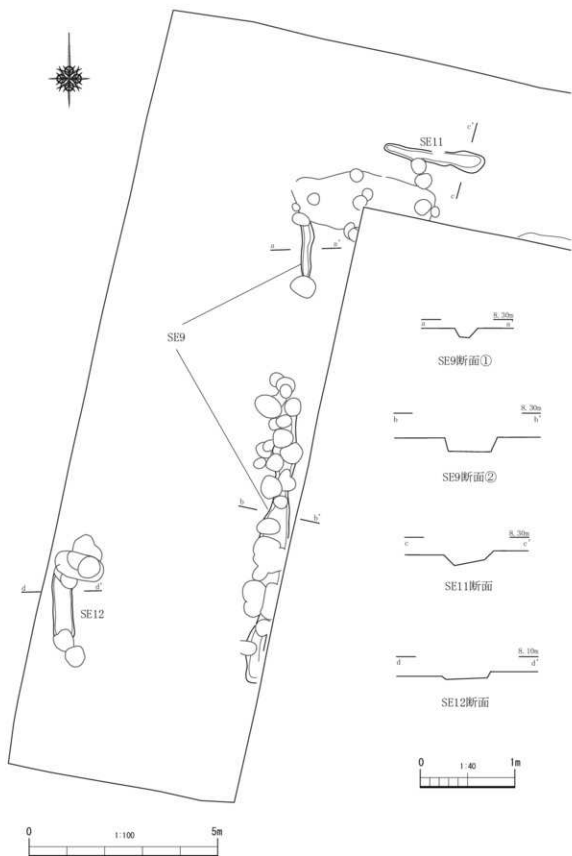
- 1 表土、碎石層、A1層。
- 2 柱穴埋土。
- 3 暗褐色 (2.5YR3/2)、粘性弱、しまり強い、細砂。径1mmの軽石粒、炭化物と土器片を含む。
- 4 3と地山砂層ブロックの混層。
- 5 暗オリーブ褐 (2.5YR3/3) 粘性なし、しまり弱い、細砂。SC8に先行する柱穴か。
- 6 暗オリーブ褐 (2.5YR3/3) 粘性なし、しまり弱い、細砂。SC8に先行する柱穴か。

第54図 土坑8実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)

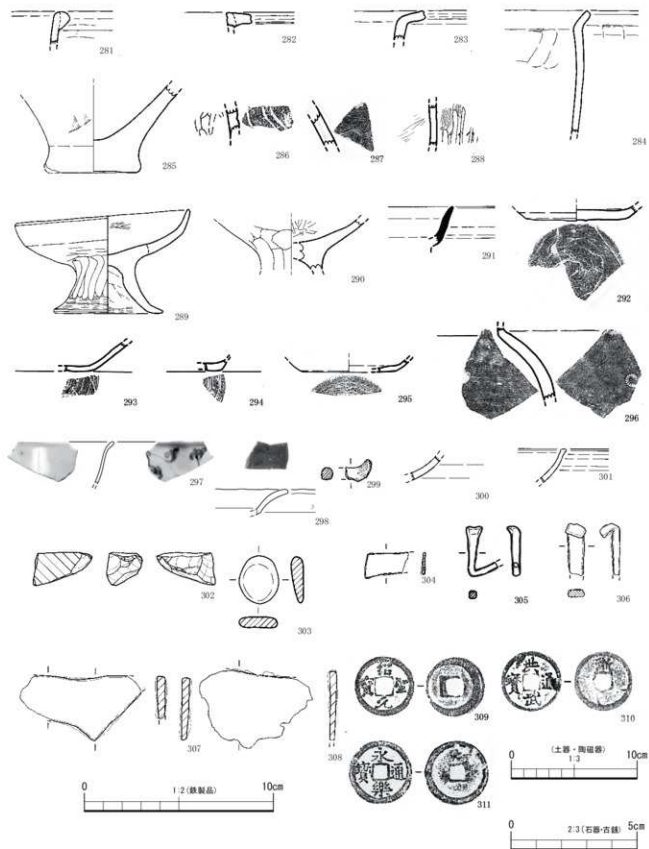


第55図 土坑13実測図 (S=1/40)

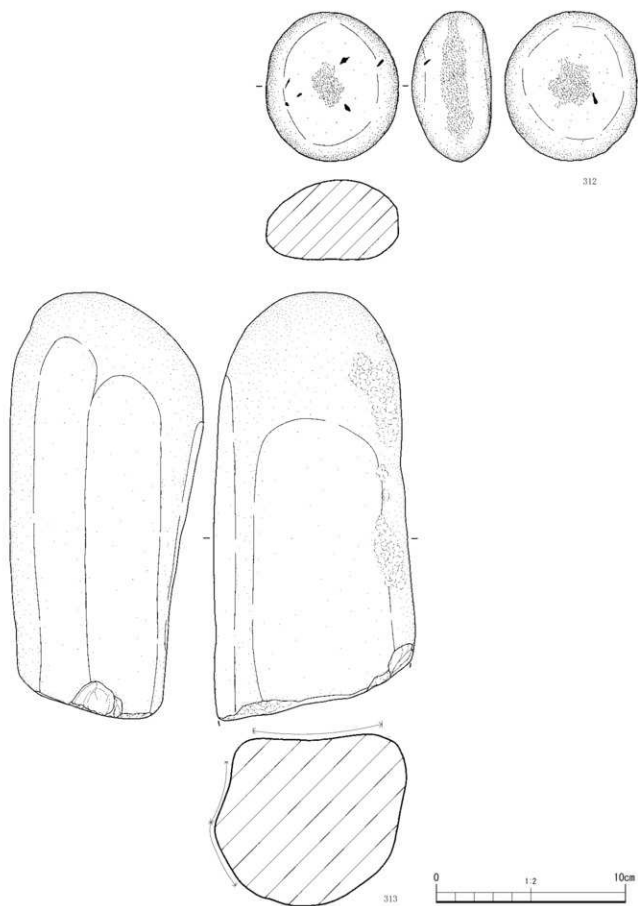
**柱穴出土遺物 (第57図)** 掘立柱建物として認定できなかった柱穴出土遺物のうち、主要なものを281から311に報告する。詳細は観察表にゆずるが、以下特徴的なものについて記述する。286は下城式の壺とみられる胴部片である。287は外面に櫛描直線文と波状文を交互に施文する胴部片である。288は外面下半部に縦方向のミガキを施し、工具による列点文を施す甕である。287と288は弥生時代中期の中部瀬戸内系土器と考えられる。289と290は同一の柱穴から出土した小型高坏である。299は青磁鳳凰耳瓶の耳部分に該当する破片とみられる。



第56図 溝状遺構9・11・12実測図(S=1/100)・断面図(S=1/40)

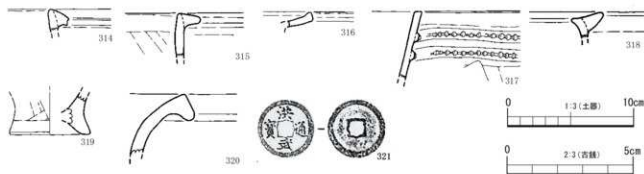


第57図 第5地点柱穴出土遺物実測図①(S=2/3・1/3)



第58图 第5地点出土遺物実測図② (S=1/2)





第59図 第5地点その他の出土物実測図 (S=1/3・2/3)

その他の出土遺物（第59図） 試掘トレンチ及び客土中出土遺物のうち主要なものを報告する。詳細は観察表を参照していただきたい。

#### 第4節 小結

弥生時代の成果については、他の地点の成果と合わせて第V章で詳述する。

中世から近世の遺構は重複が激しく、調査段階で個々の明確な前後関係を把握しきれていない点が悔やまれる。11棟の掘立柱建物は、建物長軸方向からA群（掘立柱建物24、22、26、17、16）、B群（掘立柱建物18、20、23）、C群（掘立柱建物19、21）、D群（掘立柱建物25）に分類できる。出土遺物が小破片かつ少量であることから時期の絞り込みが難しいが、いずれの建物群も貿易陶磁器の年代から15世紀後半から16世紀後半を中心とした時期に属すると考えられる。第5地点では国産陶器や中国陶磁器、銭貨も一定量出土しており、299の青磁鳳凰耳瓶とみられる破片は、管見の限り県内では類例が知られていない。遺跡に隣接する新名爪川を下ると、溝で区画された集落である囲遺跡が所在しており、12～16世紀代の中国陶磁器が多数出土している。島之内萩崎遺跡も、囲遺跡と同様に河川を利用した物流を担う集落であった可能性が考えられる。

#### 【引用文献】

- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 河野裕次 2013 「南部九州における弥生時代中期土器様式圏の動態」『古文化談叢』第69集 九州古文化研究会
- 柴畑光博 2006 「東南部九州における縄文から弥生への土器変遷」『大河』第6号 大河同人
- 續伸一郎 2022 「第2節 中世後期の貿易陶磁器」『新版概説 中世の土器・陶磁器』日本中世時研究会編 真陽社
- 堀田孝博 2016 「宮崎平野部の中世土師器」『宮崎県央地域の考古資料に関する編年的研究Ⅱ』平成27年度宮崎考古学会研究会発表要旨 宮崎考古学会
- 森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会



第13表 第5地点出土土器観察表②

発掘調査番号	図号	器種	器形	口徑	口径	底径	高さ	色		構成	調査					備考	実測番号				
								外面	内面		断面										
								A	B		C	D	E								
p.40 第37図	209	SE6	壺	—	5.5	—	—	灰黄緑	10YR8/4	良好	縦方向のハケ目・ヨコナデ	表面割落	3	2	1	微	底面：ナデ	85			
	210	SE6	壺	—	7.0	—	—	灰黄緑	10YR8/4	良好	縦方向の工具ナデ・指押さえ	ナデ 指押さえ	2	1	微	外面：黒底 底面：ケズリ 粘土：焼煎/僅	86				
	211	SE6	壺	or 壺	(8.8)	—	—	にぶい黄緑	10YR7/4	良好	縦方向の工具ナデ	—	3	2	1.5	微	外面：スス付着 内面：黒口底 底面：ナデ 粘土：焼煎/僅	84			
	212	SE6	壺	(12.9)	—	—	—	にぶい黄緑	10YR7/4	良好	ヨコナデ・ハケ目の残ミガキ	ヨコナデ・ハケ目の残ミガキ	3	2	1	微	口縁線焼結	83			
	213	SE6	壺	—	—	—	—	灰黄	黄灰 2.5Y6/2	良好	ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ目の残ミガキ	1	1	少	—	外面：スス付着	66			
	214	SE6	壺	—	—	—	—	にぶい黄	にぶい黄 2.5Y6/3	良好	ヨコナデ ミガキ	ミガキ	1	1	微	—	粘土：焼煎/少	70			
	215	SE6	壺	—	—	—	—	灰黄緑	10YR8/4	良好	ヨコナデ・ハケ目・指付突部	横方向のミガキ?	1.5	微	微	—	入土2か?	76			
	216	SE6	壺	—	—	—	—	灰黄	にぶい黄緑 2.5Y6/2	良好	3条の指付突部・ミガキ・ヨコナデ	ナデ ハケ目	2	1	微	—	粘土：焼煎/少	77			
	217	SE6	壺	—	—	—	—	黄	黄緑 2.5Y6/6	良好	3条の指付突部・ミガキ・ヨコナデ・3条の指付突部	縦方向のナデ 指押さえ	1	1	2	微	—	80			
	218	SE6	壺	—	—	—	—	灰黄緑	にぶい黄緑 10YR5/2	良好	3条の指付突部・灰黄・ヨコナデの後横方向のミガキ	ナデ	1	1	微	—	90				
219	SE6	壺	—	—	—	—	灰黄	淡黄 2.5Y6/4	良好	沈積・横方向のミガキ	ハケ目の残ミガキ	4	3	微	—	粘土：焼2mm/少	73				
220	SE6	壺	—	—	—	—	にぶい黄緑	5Y6/6	10YR6/3	良好	3条の沈積ミガキ	ナデ	2	2	2.5	多	大隅平岳産か?	74			
221	SE6	壺	—	—	—	—	にぶい黄緑	10YR7/3	10YR7/4	良好	指押さえ	摩耗著しく不明瞭	2	微	多	—	豊後系林の在来噴飯か 粘土：焼煎/僅	72			
226	SE6	壺	—	(11.0)	—	—	にぶい黄緑	5Y6/6	10YR7/4	良好	摩耗著しく不明瞭	指押さえ ケズリ	1.5	多	微	—	粘土：焼煎	59			
p.41 第38図	227	SE6上層	壺	—	—	—	—	灰黄緑	10YR8/3	10YR8/3	良好	連続縦目・指押さえの残ミガキ・ナデ	ヨコナデ・ナデ 指押さえ	2	1	1	微	—	49		
	228	SE6上層	壺	—	—	—	—	にぶい黄緑	10YR7/3	10YR7/4	良好	ヨコナデ 指付突部	ヨコナデ?	2	1	1	微	入土1	38		
	229	SE6上層	壺	—	—	—	—	にぶい黄	2.5Y6/3	10YR7/4	良好	ヨコナデ?	摩耗著しく不明瞭	3	1	1	微	東北院九州系 or 中興式	40		
	230	SE6上層	壺	—	—	—	—	灰黄緑	灰黄	10YR8/2	2.5Y7/2	良好	2条の指付突部・縦方向の工具ナデ・縦方向のミガキ・ヨコナデ	ナデ	4	1	1	—	入土1〜2	44	
	231	SE6-S16上層	壺	—	6.0	—	—	灰黄	淡黄 2.5Y6/2	5Y6/6	10YR8/4	良好	縦方向のミガキ	摩耗著しく不明瞭	2	1	1	微	外面：赤色顔料? 底面：摩耗著しく不明瞭	43	
	232	SE6上層	壺	—	—	—	—	灰黄緑	10YR5/2	10YR7/4	良好	2条の沈積ナデ	ヨコナデ 指押さえ	2	1	多	—	入土1〜2 外面：スス付着	41		
	233	SE6-S16上層	壺	—	—	—	—	淡赤黄	にぶい黄 2.5YR7/4	10YR7/4	不良	2条の沈積・摩耗著しく不明瞭	ナデ 指押さえ	3	1	2	多	—	78		
	234	SE6上層	壺	—	—	—	—	灰白	黄灰 2.5Y7/1	2.5Y6/1	10YR8/4	良好	平行タタキ	当具痕 (同心円文)	—	—	—	3	少	—	42
	235	ホウガン	壺	(21.1)	—	—	—	にぶい黄緑	10YR7/3	10YR8/4	良好	ヨコナデ・ナデ? 縦方向ハケ目・指付突部	摩耗著しく不明瞭	4	2	1	微	底面全体摩滅 入土2	37		
	236	ホウガン	壺	—	—	—	—	にぶい黄	5Y6/6	5Y6/6	10YR8/4	良好	ヨコナデ・2条の指付突部	摩耗著しく不明瞭	3	2	多	微	入土2	35	
237	ホウガン	壺	—	—	—	—	灰黄	灰 2.5Y6/2	2.5Y5/1	10YR8/4	良好	摩耗著しく不明瞭	摩耗著しく不明瞭	2.5	多	1	微	—	36		
238	ホウガン	壺	—	—	—	—	明黄緑	にぶい黄 2.5YR7/2	2.5Y6/3	10YR8/4	良好	ナデ 指押さえ	ナデ (割落)	1	微	少	—	下流式か?	34		
p.45 第43図	242	SH7(SR17)	壺	—	—	—	—	にぶい黄緑	灰黄緑 10YR8/2	10YR8/2	良好	縦方向のハケ目	ヨコナデ 指付突部	1.5	多	多	—	豊後前 下流式 粘土：片割13mm/僅	94		
	245	SH4(SR18)	壺 or 壺	—	—	—	—	灰黄緑	10YR8/4	10YR8/4	良好	平行タタキ	当具痕 (同心円文)の残ナデ	微	微	微	—	95			
p.46 第45図	248	SH10(SR19)	土師器	杯	(8.2)	(5.2)	1.7	—	灰黄	2.5YR8/4	2.5YR7/4	良好	回転ナデ	回転ナデ	1	微	—	底面：回転ヘラ切り 粘土：焼2mm/僅	26		
	249	SH27(SR19)	土師器	杯	(8.6)	—	—	にぶい黄緑	10YR6/3	10YR7/3	良好	—	回転ナデ	微	—	—	底面：回転ヘラ切り 粘土：赤黄2mm/僅	99			
	251	SH10(SR19)	土師器	杯	(8.3)	—	—	黄	灰黄 2.5YR8/6	10YR8/3	10YR8/3	良好	回転ナデ	回転ナデ	1	微	—	底面：回転ヘラ切り 粘土：焼1mm/少	98		
	251	SH10(SR19)	土師器	杯	—	—	—	灰黄	10YR8/4	10YR8/3	10YR8/3	良好	回転ナデ	回転ナデ	微	多	—	底面：ヘラ切り 粘土：赤黄6mm/1	97		
	256	SH10(SR19)	壺	—	—	—	—	にぶい黄	10YR5/3	10YR6/3	10YR6/3	良好	竹管文・ナデの後沈積	ナデ	1	微	少	—	中部畿内内系か?	96	
p.47 第47図	260	SH95(SR21)	土師器	壺	—	—	—	にぶい黄	10YR8/3	10YR7/3	良好	回転ナデ	回転ナデ	1	微	多	—	底面：回転ヘラ切り 粘土：焼2mm/少	101		

赤粘土 A: 青粘土 B: 長石・石英 C: 輝石・角閃石 D: 雲母 E: 黒炭



第15表 第5地点出土陶磁器観察表

掲載頁 図番号	番号	遺構等	種別	器種	法量cm( )実寸			産地	時期	備考	実測 番号
					口径	底径	器高				
p. 46 第43図	247	SR37(SR19)	青磁	甕	—	—	—		外面 蓮文 青磁蓮中筒C群(小野1982)	104	
	263	SR73(SR23)	青磁	甕	—	5.25	—	龍泉窯	見込 刻印あり 打ち欠き	115	
	264	SR196(SR23)	青磁	甕	—	—	—	14C初～後半	外面 蓮文 龍泉窯青磁甕IV類(譜2022)	117	
p. 48 第44図	265	SR73(SR23)	陶器	甕	—	—	—	備前か		116	
	270	SR149(SR25)	磁器	甕	—	—	—	15C後半～16C 前半	白磁藍土2類(森田1982)	121	
p. 50 第52図	271	SR19(SR30)	磁器	甕	—	—	—	16C後半	青花 外面 纏線 内面 纏線 染付黒群(小野1982)	118	
	273	SC5	陶器	甕	—	(4.2)	—	肥前		11	
	274	SC5	磁器	甕	—	(6.0)	—		青花藍 外面 纏線 内面 纏線	12	
p. 53 第57図	297	SR99	磁器	甕	—	—	—	14C後～15C中	青花 外面 纏線 内面 纏線 染付黒群(小野1982)	119	
	298	SR297	陶器	甕	—	—	—	15C後～16C中	龍泉窯茶棧口鉢藍(譜2022) 内面 文様	123	
	299	SR一括	青磁	甕	—	—	—	12C～13C?	青磁風耳甕	124	
	300	SR35	青磁	甕	—	—	—	14C初～後半	龍泉窯茶棧IV類(譜2022)	120	
	301	SR35	陶器	甕	—	—	—	近畿		122	

※ ( ) は残存法量

第16表 第5地点出土石器観察表

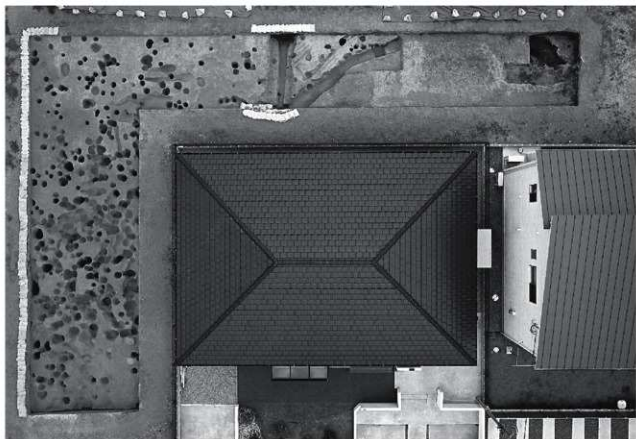
掲載頁 図番号	番号	遺構等	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測 番号
223	S06	磨製石器	珩岩	(2.5)	2.2	0.2	(1.0)	先端部 側縁部 欠損	127	
224	S06	剥片	珩岩	4.6	(3.5)	(0.9)	(17.6)	欠損	131	
225	S06	敲石	砂岩	9.2	3.7	1.9	98.3		128	
p. 45 第42図	239	SR76(SR06)	礫石	チャート	1.6	1.3	0.6	1.9		125
p. 48 第49図	267	SR75(SR20)	礫石	尾崎山礫性岩	9.9	9.35	4.4	628.6		129
p. 50 第50図	272	SR225(SR06)	火打石	チャート	1.35	2.7	1.6	8.1		134
p. 53 第57図	302	SR173	火打石	チャート	1.3	2.35	1.45	4.6		132
	303	SR201	礫石	珩岩	1.9	1.55	0.55	2.3		133
	312	SR110	敲石	砂岩	7.9	7.0	4.2	334.7		130
p. 54 第58図	313	SR232	礫石	砂岩	(22.60)	10.6	10.25	(3540)	断面に光沢	135

※ ( ) は残存法量

第17表 第5地点出土金属製品観察表

掲載頁 図番号	番号	遺構等	器種	材料	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測 番号
241	SR298(SR17)	鋼銃	鋼	2.25	2.22	0.13	1.6	無文銭か	111	
243	SR43(SR18)	刀子か	鋼	(3.05)	1.9	0.45	(3.8)		148	
244	SR239(SR18)	針	鋼	4.8	1.05	0.42	4.1		140	
245	SR239(SR18)	鋼銃	鋼	2.2	2.2	0.1	1.3	洪武通寶	112	
p. 46 第45図	252	SR306(SR19)	刀子か	鋼	(2.0)	1.66	0.32	(1.3)	本質付着	138
	253	SR306(SR19)	刀子か	鋼	(1.5)	(0.9)	0.25	(0.5)	本質付着	139
	254	SR207(SR19)	鋼銃	鋼	2.33	2.33	2.0	3.7	洪武通寶 裏面「福」	113
	255	SR207(SR19)	鋼銃	鋼	2.38	2.38	1.5	2.9	洪武通寶	114
	257	SR194-SR195 (SR20-SR21)	針	鋼	(3.45)	0.6	0.51	(1.8)		137
p. 46 第46図	258	SR194(SR20)	鋼銃	鋼	2.5	2.5	0.13	2.8	聖徳元寶(聖徳太子) (北史1101年)	105
	259	SR194(SR20)	鋼銃	鋼	2.52	2.52	0.2	3.5	永樂通寶	106
	268	SR273(SR23)	同状鉄製品	鋼	5.95	1.2	0.75	8.0		142
p. 53 第57図	304	SR226	刀子か	鋼	(2.3)	1.4	0.25	(1.3)		143
	305	SR5	針	鋼	2.6	0.71	0.45	(2.3)		145
	306	SR226	針	鋼	(2.75)	1.15	0.46	(3.2)		144
	307	SR135	不明鉄製品	鋼	96.43	3.4	0.6	(21.2)		147
	308	SR129	同状鉄製品	鋼	(4.15)	(6.0)	0.55	(15.2)		146
	309	SR152	鋼銃	鋼	2.35	2.35	0.14	2.6	聖徳元寶(行基) (北史1094年)	108
	310	SR152	鋼銃	鋼	2.38	2.38	0.18	2.9	洪武通寶 裏面「唐」	107
p. 55 第59図	311	SR271	鋼銃	鋼	2.52	2.52	0.17	4.0	永樂通寶	109
	321	キヤク土	鋼銃	鋼	2.3	2.3	0.2	3.4	洪武通寶	110

※ ( ) は残存法量



調査区垂直写真



溝状遺構 6 完掘状況 (南東から)

図版9



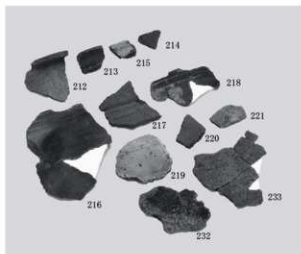
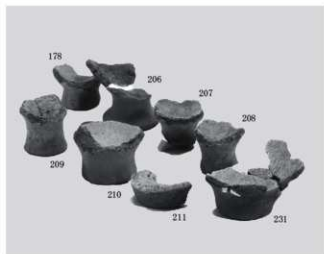
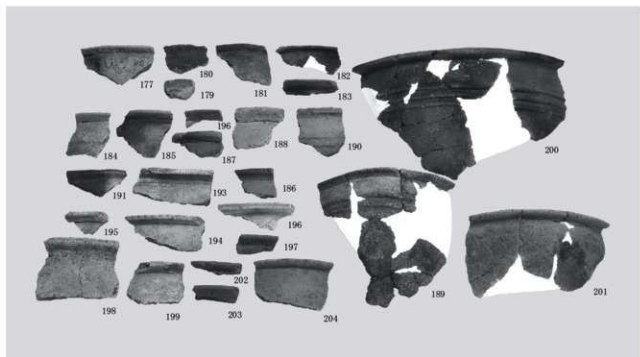
溝状遺構6土層①（南から）



溝状遺構6土層②（南から）

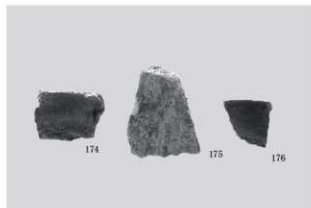


溝状遺構6下層  
遺物出土状況（南西から）

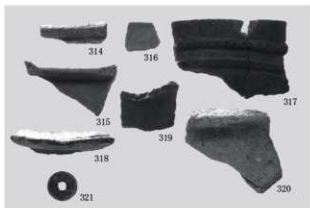


上段：構状遺構 6 出土土器①  
 中段左：構状遺構 6 出土土器②  
 中段右：構状遺構 6 出土土器③  
 下段左：構状遺構 6 出土土器





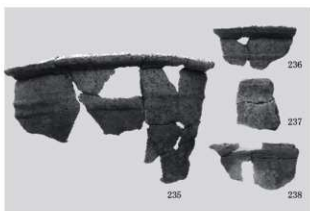
堀立柱建物 14・15 出土遺物



その他の出土遺物（試掘トレンチ他）



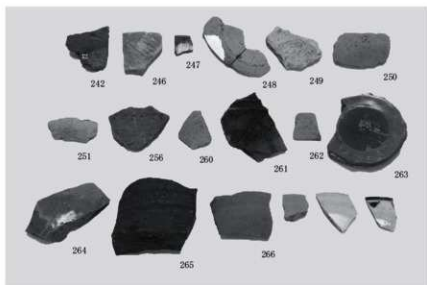
調査区北東部遺構完掘状況（西から）



BⅢ・BⅣ層出土遺物



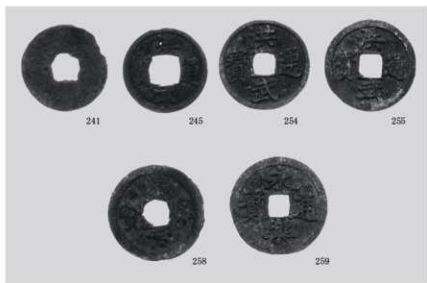
調査区南側中世～近世遺構完掘状況



中世堀立柱建物出土遺物①

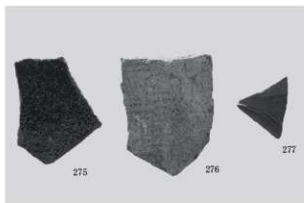
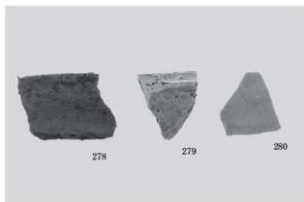


中世堀立柱建物出土遺物②

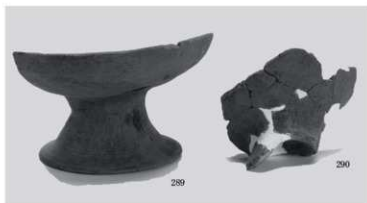


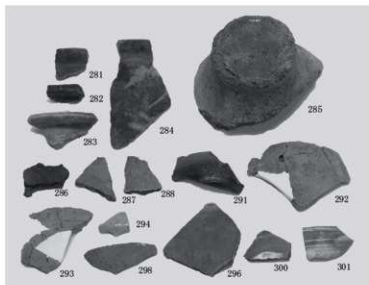
中世堀立柱建物出土遺物③

図版 13



- 1 段目左：中世掘立柱建物出土遺物④
- 1 段目右：土坑 8 調査状況（東から）
- 2 段目左：土坑 8 出土遺物
- 2 段目右：土坑 5 調査状況（西から）
- 3 段目左：土坑 5 出土遺物
- 4 段目左：柱穴出土遺物①（古墳時代）
- 4 段目右：柱穴出土遺物②（中世）

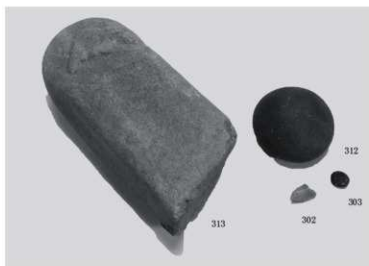




柱穴出土土器・陶磁器



柱穴出土鉄製品・古銭



柱穴出土石器

## 第V章 まとめ

### 第1節 島之内萩崎遺跡の弥生時代の調査成果

本遺跡では、今回報告した3つの地点全てから弥生時代～古墳前期初頭の遺構や遺物が確認された。第2地点では中期前半、後半～後期初頭、終末期～古墳前期初頭の遺物が出土しているが、当該時期の遺構は不明瞭である。第3地点では溝状遺構4からまとまった量の土器が出土している。溝状遺構4は中期前半の土器を少量含むが、弥生時代中期後半～後期初頭（河野4期：前掲）の下城式甕と、いずれも搬入品で赤色顔料が付着した須玖式鋤先口緑壺66や豊後系壺67がまとめて出土していることから、後者の時期の遺構と考えられる。なお、溝状遺構4は土坑5と重複しており、溝状遺構4出土の免田式長頸壺4型式（中村1988）や庄内式系小型器台を始めとした土器群は土坑5に伴うと考えられる。土坑5は甕6a型式（河野2019）や、タタキ痕を残す甕、鉢、小型壺といった近畿第V様式系を含む土器群で、古墳時代前期前半（VIa～VIb期：河野2019）に比定される。第3地点ではこの他に、搬入品の伊予系回線文壺157や擬回線文を施した在地産大型器台または壺151、内外面に赤色顔料が付着した搬入品の下城式系壺154といった外来系土器や、結晶片岩の可能性のある剥片が出土している。

第5地点で検出された溝状遺構6は、本遺跡が所在する砂丘の東側縁辺部に造られており、溝の東側は河成段丘面へと移行する。掘削は下層出土遺物から前期末（柴畑2c期：前掲）頃と考えられ、中期後半（河野3期：前掲）までには検出面まで埋没している。本遺跡では、第1地点（未報告）でも最大幅2mを測る断面V字の大溝が検出されており、出土遺物も中期が主体とみられ、位置関係から第5地点の溝状遺構6と接続する可能性もある（第60図）。いずれにせよ、弥生時代前期末～中期後半の島之内萩崎遺跡は、大溝（環濠）を伴う拠点の集落の一つであると考えられる。

#### 【引用文献】

- 河野裕次 2019「宮崎平野南部における弥生時代後期から古墳時代前期の土器様相一編年の細別と外来系土器の影響について」『宮崎考古』第29号 宮崎考古学会
- 中村直子 1988「免田式土器再考」『人類史研究』第7号 人類史研究会



第60図 第1地点・第5地点溝状遺構位置図(S=1/5000)

## 第2節 島之内萩崎遺跡の近世の調査成果について

『佐土原藩譜』には「元禄3年(1690)、6代佐土原藩主島津惟久が番代を務めた島津久寿に3000石を分知し、島之内に移った」と書かれており、ここから旗本島之内島津家が始まった。島之内萩崎遺跡にはこの島津家の屋敷があった場所と言われており、第3地点は『佐土原藩分限帳』に記載されている分地領給人格(八石内物成三俵)初山甚蔵の屋敷地の南端に当たる。また第3地点調査時の聞き取りで島之内島津家屋敷地が第3地点の西側、第2地点の北側の区画にあったという情報を得ることができた(第2・4図)。この島之内島津家の西側と南側には島之内集落の中心となる通りがあったようで、これは「佐土原藩領図(広瀬旧城下之図)」で確認することができる。第2地点と第3地点では溝状遺構が検出されており、これらは武家集落の区画やこの通りの痕跡であった可能性が考えられる。

今回報告した第2・3地点では一定量の近世の陶磁器類が出土している。宮崎市では近世の調査事例が蓄積されており、特に佐土原城下では各調査地点で出土した陶磁器に特徴がみられることが分かっている。それらと今回の調査成果について表18にまとめた。この表を見ると佐土原藩の上級武士団である追手口の屋敷地からは肥前以外の各地の陶磁器が出土しており、鴨之口・十文字口の屋敷地からも少量ではあるが肥前以外の産地の陶磁器が確認されている。しかし、今回の調査では備前焼の徳利と堺・明石産の播鉢が各1点見られる他には肥前以外の産地の陶磁器を確認することができなかった。また高級品とされる白薩摩や京焼色絵陶器も出土していない。調査面積や遺跡の残存状況によって出土物の有無については影響をうける可能性は考えられるが、このような陶磁器等の出土状況の違いは各地点での武家の禄高の差を示していることが推測される。

第18表 佐土原藩領域における出土陶磁器一覧表

遺跡名	島之内萩崎3	佐土原城6次		佐土原城8次	平城
人名	初山甚蔵	渋谷直記	郡可範平	池田舟外	本田平之丞
家格(役職)	給人	寄合	騎馬	中小姓	徒歩
石高	8	300	110	35	13
肥前陶器	○	○	○	○	○
肥前磁器	○	○	○	○	○
肥前高級品	×	○	○	×	×
関西系陶器	×	○	○	○	○
瀬戸美濃焼	×	○	○	○	○
萩焼	×	○	○	×	×
備前焼	○	○	○	×	×
京焼色絵	×	○	○	×	×
中国産磁器	×	○	○	×	×
薩摩磁器	×	○	○	×	×
白薩摩	×	○	○	×	×
黒薩摩	×	○	○	○	○
調査面積	74㎡	2000㎡以上	800㎡以上	400㎡	50㎡
参考文献	本書 (宮崎市143集)	宮崎市109集『佐土原城跡第6次調査』		宮崎市107集『佐土原城跡第8次調査』	宮崎市131集『平城遺跡』

※肥前磁器の高級品とは有田焼・色絵磁器・瑠璃碗・大皿など  
 ※佐土原城跡6次調査面積は両家を足して3125㎡である

# 報告書抄録

ふりがな	しまのうちはぎざきいせき						
書名	島之内萩崎遺跡（第2・3・5地点）						
副書名	国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金対象事業発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第143集						
編集者名	稲岡洋道 秋成雅博 河野裕次						
発行機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒889-1696 宮崎市清武町西新町1番地1（清武総合支所3階） TEL：0985-85-1178						
発行年月日	2024年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
島之内萩崎 遺跡（第2地点）	宮崎市大字島之内 7680-1、7681-1	45201	2-061	131°45'05	31°99'12	20160218- 20160308	101㎡
調査原因	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		備考
共同住宅建築に伴う擁壁設置	集落	古墳 近世	溝状遺構		土師器、陶磁器		
特記事項							
島之内萩崎 遺跡（第3地点）	宮崎市大字島之内 字萩崎 7671 番 3	45201	2-061	131°45'16	31°99'14	20170508- 20170531	74㎡
調査原因	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		備考
宅地造成	集落	弥生 古墳 近世	土坑 溝状遺構		弥生土器、土師器、 陶磁器		
特記事項	弥生時代終末～古墳時代前期の土器がまとめて出土した土坑を検出した。						
島之内萩崎 遺跡（第5地点）	宮崎市大字島之内 字萩崎 7703 番 2 外	45201	2-061	131°45'30	31°99'09	20190312- 20190605	221.6㎡
調査原因	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		備考
宅地造成	集落	弥生 古墳 中世 近世	掘立柱建物、大溝、 土坑、溝		弥生土器、石器、土師器、 須恵器、国産陶磁器、貿易 陶磁器、鉄製品、古銭		
特記事項	弥生前期末頃に掘削された大溝を検出した。また、中世後期を中心とする柱穴を多数検出した。						

宮崎市文化財調査報告書第 143 集  
島之内萩崎遺跡（第 2・3・5 地点）

国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金対象事業  
発掘調査報告書

2024 年 3 月

発行 宮崎市教育委員会